

研

究

紀

要

第

8

号

最花式土器 ー在地式土器群の様相ー

成田 滋彦

1～20

エックス線透過撮影の各種遺物への利用

白鳥 文雄

21～26

自然科学的分析一覧

白鳥 文雄

27～54

六ヶ所村表館(1)遺跡 a 地点採集の縄文早期資料など

福田 友之

55～60

2003.2

青森県埋蔵文化財調査センター

最花式土器

－在地式土器群の様相－

成田 滋彦

目次

- 1 はじめに
- 2 最花式を振り返って（研究史にかえて）
- 3 土器の共伴と層位の問題
- 4 属性の抽出と分類
- 5 各地域における最花式
 - 津軽半島地域
 - 上北湖沼地域
 - 馬淵川・新井田川地域
- 6 おわりに
 - 最花式土器とは
 - 最花式の地域的な様相
 - 最花式の細別
 - 最花もどきについて

引用・参考文献

1 はじめに

この土器型式に初めてであったのは、今から30年前の三厩村の中の平遺跡（鈴木1975）の調査にさかのぼる。

当時学生であった筆者は、地文縄文地に縦位方向に長楕円形文を施す土器が、いつの時期に該当するのかわからず困ったことを思いだす。

その後、県内の縄文時代中期集落において、大規模集落の一つに挙げられる六ヶ所村の富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）を調査した際に、多量の最花式土器が出土した。

しかし、報告書中の整理において十分に論考する事ができず、報告書以外に稿を新たにし、これらをまとめなければならないと思いつつ数十年がたってしまった。

昨年度、小笠原雅行が研究紀要第7号において、「最花式雑感」（小笠原2002）という論考を掲載した。

この論考を読んで、土器型式の研究の重要性を再認識するとともに、数十年前にまとめようと思った最花式を再検証しようと思った次第である。

また、最近の根拠がはっきりしない情報を基にした討論は、年代の縦軸となるべき土器の研究を全く無視した内容であり、あまりにも根拠のない空論としかいえないものが県内では多すぎると思われる

る。

正しい討論は、土器の編年を押さえてこそ始めるべきものであり、基礎的な土器編年の研究なくしては青森県の考古学の発展はないと認識した次第である。

なお、今回は県内の最花式の資料を中心として、分析・検討を加えたものである。

2 最花式を振り返って（研究史にかえて）

最花式を初めて紹介したのは、江坂輝彌が森田村の石神遺跡（江坂1970）で報告したのが最初の報告である。

江坂は、最花式土器（円筒土器上層 f 式）を括弧が書きで円筒土器上層式と記載し、円筒土器の系譜を引く土器群であると、理解していると考えられる。

この事は、意外と注目されていないが、最花式土器が円筒土器の系譜を引く土器型式であるとした点は、重要な意味を含んでいる。

なお、報告書中では最花式を第1類土器～第3類土器と3分類しており『…最花式土器としての特徴をとらえ本型式のものとしては、第1類と第3類土器を提示し…』と定義した。

しかし、最花式設定の混乱の第一歩は、円筒上層 e 式土器を含んでいる第1類土器を最花式とした点が、最花式を迷走させる原因となった（注1）。

また、二つ目の混乱は、『…なお本型式の土器を、かつて1939（昭和14年）年に角田文衛教授が「陸奥榎林遺跡の研究」の中で「榎林式土器」の名称を付して発表されたことがあった…』として、最花式＝榎林式と並行関係にあるとした点である。

この二つの混乱は、その後の最花式の研究に尾を引くこととなる。

1974年に村越潔は、円筒土器を大系的にまとめた「円筒土器文化」（村越1974）を発表した。

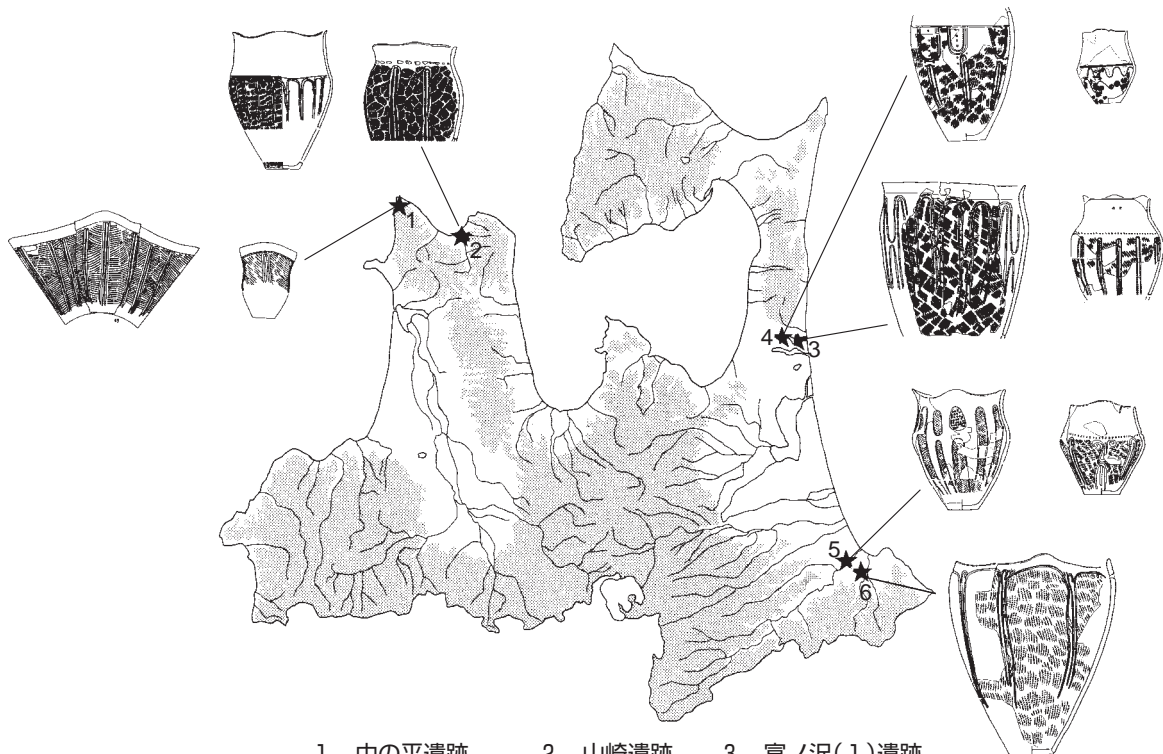


図1 遺跡位置図 1. 中の平遺跡 2. 山崎遺跡 3. 富ノ沢(1)遺跡
4. 富ノ沢(2)遺跡 5. 西長根遺跡 6. 松ヶ崎遺跡

その本文の中で、最花式の項目を設け、江坂氏の「石神遺跡」を基本とした考えを示しながらも、石神遺跡の第1類土器を除外し、第3類土器を最花式の標準的な土器であると記載している。

また、最花式の特徴として『…この型式の土器は、器形の大部分が肩部の張るそして口頸部の内湾した深鉢形を呈し、折り返し状の口縁をもつものや、稀には浅鉢形もある。文様は沈線の縦に施された長円形文が多く、また沈線による垂下文も存在する。地文は斜縄文で右下がりのものが多い…』という土器の特徴を文章にして提示しているのであるが、図化したのは、広口壺形土器数点のみであり、不明な点が多い内容である。

なお村越は、当時の土器の分布状況から、上北・三八地域を榎林式分布支配圏・下北地域を最花式分布支配圏と考えており、榎林式と最花式を同一時期とした。この考えは江坂の二つ目の混乱である最花式＝榎林式の理論に立脚したものであり、村越の型式学的な誤認と筆者は考えている。

しかし、当時の極端な遺物の出土例の少なさから誤認するのもいたしかたない情勢であった。

この遺物の少なさは、小笠原好彦（小笠原1974）が「円筒式文化の崩壊とその意義」（小笠原1974）の中で円筒式文化が崩壊し、大木式文化にとって代わられるという過激な発言も表れた。

このような中期後葉の混迷の様相を見直し、新視点で展開したのは、三厩村の中の平遺跡（鈴木1975）の報告である。

鈴木克彦は、榎林式→中の平Ⅱ式→中の平Ⅲ式の土器編年の序列を発表した。また、翌年に論考した「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」（鈴木1976）は、中の平遺跡の発掘報告と共に鈴木編年の基盤となっているものである。

その後、一連の編年序列は縄文土器大観1（鈴木1989）・日本土器辞典（鈴木1996）で記載されるように、一貫して土器編年序列は替わることはない。

鈴木が設定した中の平Ⅲ式を表す特徴として、縦位沈線を施文し、その上端を弧状につなぐ文様と平行沈線間に連続刺突を施す文様を基本的に提示しているが、その後の資料増加に伴い中の平Ⅲ式は変容していく。

なお、鈴木論考の中で、**大木系土器文化**という用語が使われ、現在も中期後葉を中心として、県内の報告書中で広く使用され流布されているが、大木系土器群を用いたのは、古くは林謙作が「日本の考古学Ⅱ 縄文時代」（林1965）に於いて大木系土器群を大木式そのものの用語としてもちいている。

一方、鈴木の考えは林の考えと違い大木系土器文化の理解を『…第一に大木系土器の出自は、大木式土器の直接的な波及による結果もたらされたものであること、第二にそういった第一段階から変化発展した次の段階では、型式変遷とは直接に係わることなく当該地方のオリジナルの推移を示しており…』つまり、鈴木の考えは、円筒土器は崩壊し大木式土器文化圏の枠の中に入り、あくまで亜流の地域に存在する土器群と理解しており、その思考は小笠原の考え方（小笠原1974）に近いのではないかと考えられる。

また、富樫泰時が縄文土器大成2—中期「東北地方」（富樫1981）の中で、円筒上層式以降の土器を『…円筒土器様式圏の伝統のうえに成立した変化とみなすことができ、大木土器様式の影響をうけながらも、それとは異なった雰囲気の土器をつくりだしたものと解釈…』とし、中期後葉の土器群は、円筒土器が消失したのではなく、在地式土器群が引き続き系譜として引き継がれ、その系譜は十腰内式土器を生み出したと記載し、円筒土器様式圏の残存がみられるとして、鈴木の考え方と相反する意

見もみられる。

ところで鈴木は、中の平遺跡から区画文はみられないのは、時期差ではなく地域差であると述べているが、この地域差は「東北地方北部の縄文中期後半の土器」（鈴木1998）では、西長根遺跡出土の磨消縄文の土器群を一つの地域差として捉えており、鈴木の世界差の考え方は、時間がたつにつれ変化がみられるものである。

その後、古市豊司は三内沢部遺跡の第9号住居跡と第22号住居跡の土器の文様施文の相異から鈴木が唱える地域差ではなく、中野平Ⅲ式の細分を考慮した時期差を想定した（古市1978）。

高橋潤は、県内の資料を用いて中の平Ⅲ a式とⅢ b式の二分に細別し、変遷を提示した（高橋1988）。

また、秋田県鹿角市の天戸森遺跡（秋元1984）が1981・1982年に調査がおこなわれ、青森県六ヶ所村の富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）で、中期の環状集落の調査が1989、1990年におこなわれ、東北北部の大規模な縄文集落の調査が続き、最花式の良好な資料が出土した。

特筆すべき点は、標識遺跡である最花貝塚の調査が開始された事である。最花貝塚は、第1次から第4次調査（橋1978・1980・1983・1986）までおこなわれたが、標識遺跡でありながら、引用されないという不運にみまわれている。

その原因としては、第1・2次調査の第Ⅲ層中の出土土器を一括で把握している点や、第3次調査の橋善光の『…何をもって大木式系土器の地方型とするか、何をもって最花式とするのかという点になればあまりにも問題が多くなり…』（橋1983）という最花式の認定への悩みであり、当事者の最花貝塚調査時点での苦悩は、そのまま土器型式設定の混迷へと導いたと思われる。

そのため、報告書中では最花式を読みとることが難しく、多くの研究者は引用をためらっているものと思われる。

また、八戸地区では縄文時代中期の大規模集落である松ヶ崎遺跡（村木1994・小笠原1995・1996）と西長根遺跡（小笠原・小保内1995）の調査がおこなわれ、磨消縄文を主体とした最花式が出土した。

この西長根遺跡の第4号住居跡出土の磨消縄文グループに対して、鈴木は西長根式（鈴木1998）を設定し、中の平Ⅲ式と併行関係にあるとした。

2002年に小笠原雅行（小笠原2002）は、最花式土器雑感において最花式の土器の属性をとりあげ、最花式をコンパクトにまとめている。

以上のように、最花式研究の歩みを概観したが、最花式が本県の縄文中期後半期の一つの土器型式に位置づけられている一方、その実態については不明な点が多い土器型式である。

3 土器の共伴と層位の問題

土器型式を把握する前提としては、第一義的に層位及び共伴関係を押さえる事が前提であろう。それでは最花式ではどうであろうか。小笠原雅行（小笠原2002）の見解は、土器の共伴関係について西長根遺跡の第10号住居跡内の層位遺物のみで、共伴関係は少ないとしているが、果たしてそうであろうか検証してみたい。

最初に遺物包含層を概観すると、中の平遺跡のみの出土報告しかない（注3）。中の平遺跡の報告の中で、『…中の平遺跡では、この一群の土器は榎林式や中の平Ⅱ式を若干混在して出土しながらも、榎林式とは若干層序を異にしてより上層に出土した…』（鈴木1975）〔ゴシック体は筆者作成〕という

報告は重要である。

しかし、柳沢清一は中の平遺跡の出土報告には否定的な見解であり、中の平Ⅱ式・Ⅲ式が同一層位で出土しているというように認識し、土器型式を全面に否定する考え方は筆者には理解できない（注4）。

現段階で層位関係で確認できたのは、中の平遺跡の一例のみである。

また、遺跡内の平面的な出土分布から、その時期差を探るやり方も、筆者は土器型式を考える有効な手段と考えている。

つまり、今別町山崎遺跡（小笠原1982）にみられるC地区の一括遺物で出土した中の平Ⅲ式の単的な文様パターン出土などは、一時期の廃棄として注目される所である。

第二の出土状態からの検証方法は、遺構内という狭い空間内での把握方法である。この方法でも、すべてが把握できるとは限らない。遺構内から出土する土器が当時の器種組成・文様施文の土器をすべて廃棄しているのかという疑問がのこるのである。

また、遺構どうしの重複関係は型式設定の指標ともなりえるが、激しい遺構の切り合いは、重複の確認のまちがいがみられる。特に柳沢が指摘した（柳沢1991）鹿角市天戸森遺跡の第S I 71A・S I 71B号住居跡を指標としている点については、問題が多い（注5）。

なお、遺構内の良好な資料は、山崎遺跡（小笠原1982）・富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）・西長根遺跡（小笠原・小保内1995）から出土した遺構内の一括土器であり、5地区における最花式の項目で詳しく検討したいと思う。

共伴遺物に関しては、田中琢（田中1978）がモンテリウスを引用して『…同時代の製品であるとみなしうるのは、一括遺物において30回以上組み合わせになって発見されることが必要だ…』という理論は、筆者も同意見であり1例のみをとりあげて型式設定することは危険であり、共伴遺物の事例を吟味し、型式設定の指標とすべきと考えたい。

4 属性の抽出と分類

土器には、多くの属性があるが、ここでは形状と文様の二種を取り上げることとする。

形状（図8）

土器のもつプロポーシオンで、分類を行う。

A種 口頸部が内反するもので、口頸部の内反度で二種に細別できる。

A種1 口頸部が内反するもので、本種の中にも胴部が張るものと、張らないものとに分かれる。

（図8-1・22）

A種2 口頸部の内反が強く、肩部が極端に張る形状である。

（図8-8）

B種 胴部が張り口唇部寄りが内湾する形状である。また、口縁部が極端に張る形状である。

（図8-17）

C種 底辺部から口縁部にかけて外反する形状である。

（図8-14）

D種 底辺部が内反し、台部をゆうする形状である。

鹿角市天戸森遺跡

以上のように A～D種の4種類の形状に分類することができる。これらの形状は、A種は、A種1が深鉢形・鉢形、A種2の肩部が張るものは広口壺形、B種及びC種は、深鉢形・鉢形に、D種は

台付鉢形を呈するものである。

文様 (図8)

最花式には数多くのバリエーションをもつものであり、これらを抽出すると次のようになる。

なお、文様構成は4段の文様構成・2段の文様構成・無段の文様構成と大きく3つに分類することが可能であり、各種の文様構成毎に概観する。

1段の文様構成 (懸垂文)

1段というのは、文様が単独で構成され、上下に分かれていない事を表すものである。また、懸垂文は上下端のどちらかが開口している文様を、懸垂文という用語で表したい。

- ・直線状及び交差状に2～3条を束にして施文しているもの。(直線文) (図8-1)
- ・上端を弧状で閉じ、下端が開いているもの。また、その内部に直線及び連続刺突を施文しているもの。(長楕円形文) (図8-7)
- ・先端が丸くなり、蕨文様のもの。(蕨手文) (図8-2)

この上記の文様が一段の文様の基本であり、直線文・長楕円形文・蕨手文が個々の文様単位であり、これらを総称して懸垂文と呼称する。

2段の文様構成 (区画文・懸垂文・連続文)

2段の文様構成というのは、上下2段にわかれた文様構成のことを2段と表現する。

なお、区画文とは上端がつながれた文様であり、連続文は蛇行する文様を表している。

- ・上位を区画文・下位を懸垂文で施文しているもの。(長楕円形文) (図8-17)
- ・上位を連続文・下位を懸垂文で施文しているもの。(連続・長楕円形文) (図8-22)
- ・連続文を多段化して施文しているもの。(蛇行文) (図8-20)
- ・上位を上端が開口しているJ字状文、下位を連続文を施文しているもの。(J字状・連続文) (図8-25)

上記のように、文様のバリエーションが多い点の特徴である。

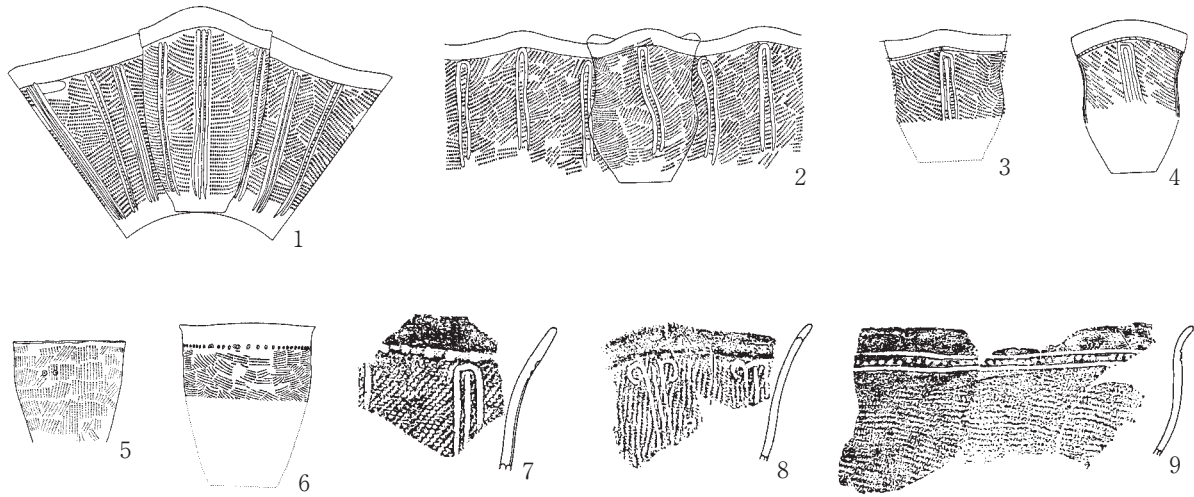
無段のもの (図9)

本類は、文様を構成しないものを本類している。

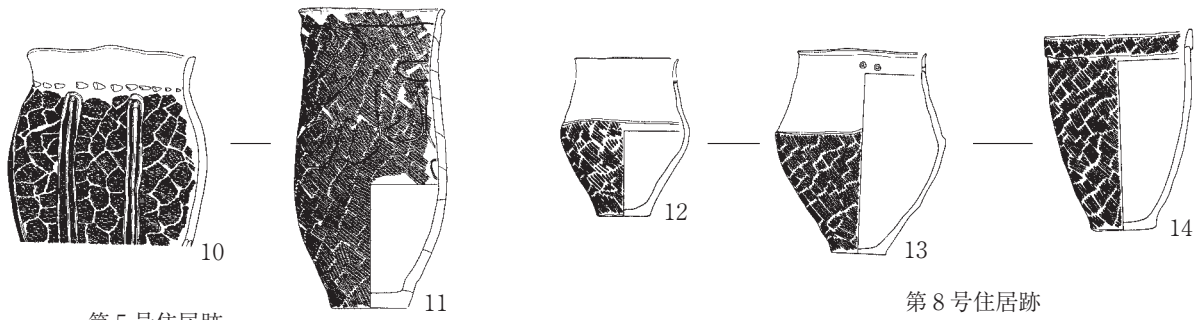
- ・横位に連続刺突を施文しているもの。(図8-38)
- ・横位に撚糸圧痕を施文しているもの。(図8-39)
- ・刺突と撚糸圧痕を施文しているもの。(図8-12)
- ・縄文を施文しているもの。(図8-41)

上記のように、連続刺突・撚糸圧痕・刺突と撚糸圧痕・縄文の文様であり、これらは器面が飾られていない土器である。

この無段のものに分類した土器は、最花式の中で多く出土する類である。

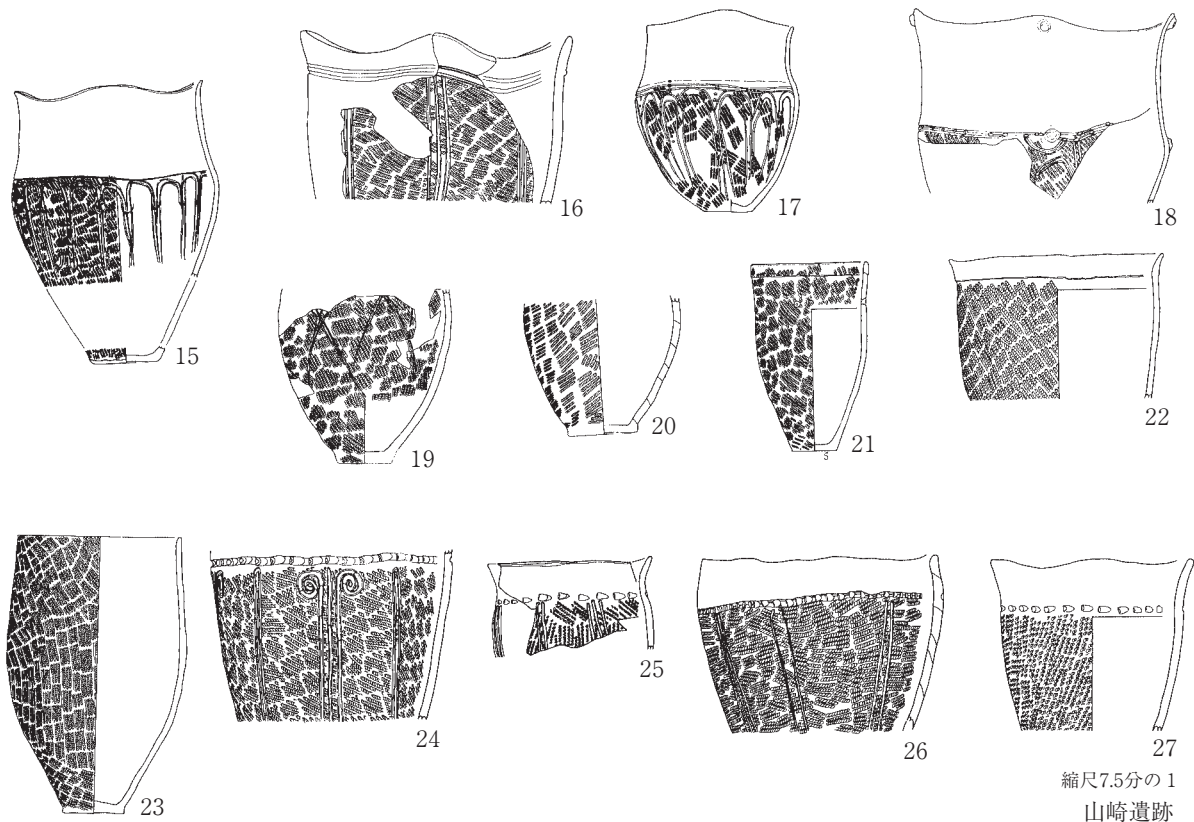


中の平遺跡



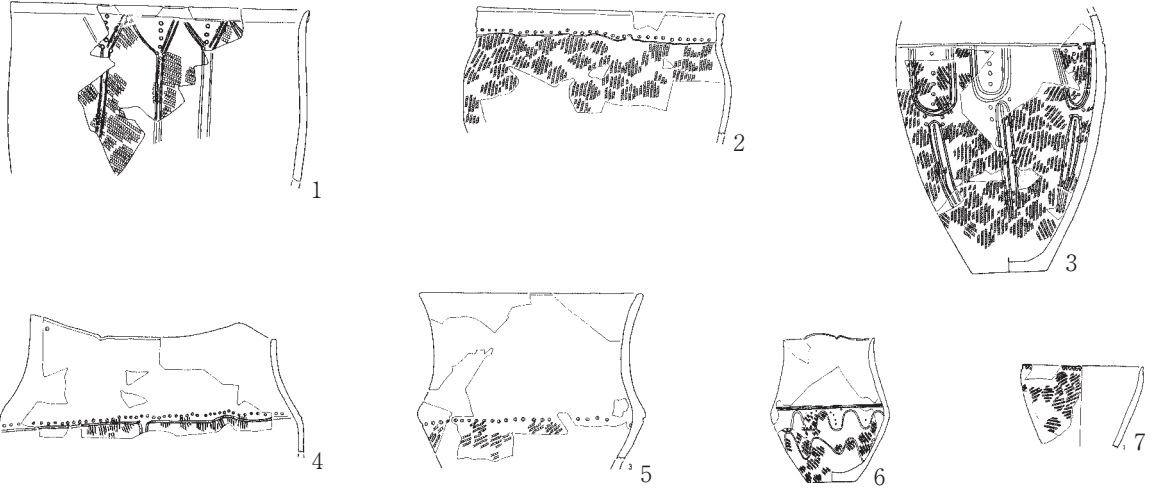
第5号住居跡

第8号住居跡

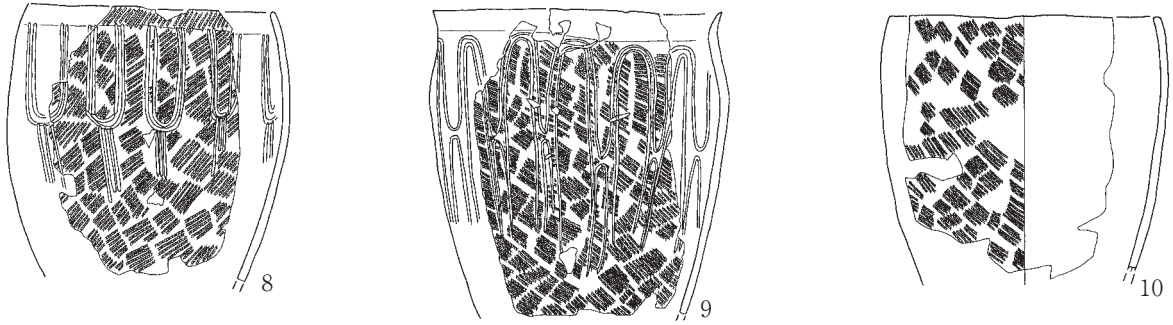


縮尺7.5分の1
山崎遺跡

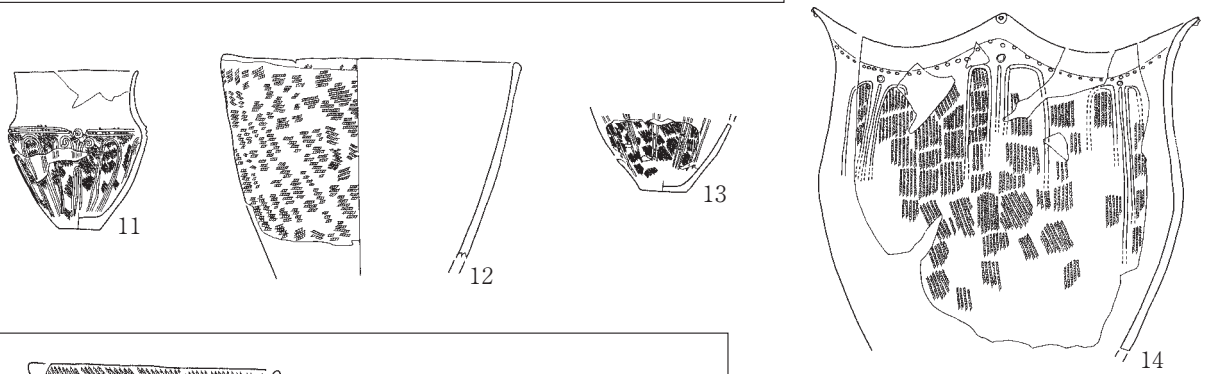
図2 中の平遺跡・山崎遺跡



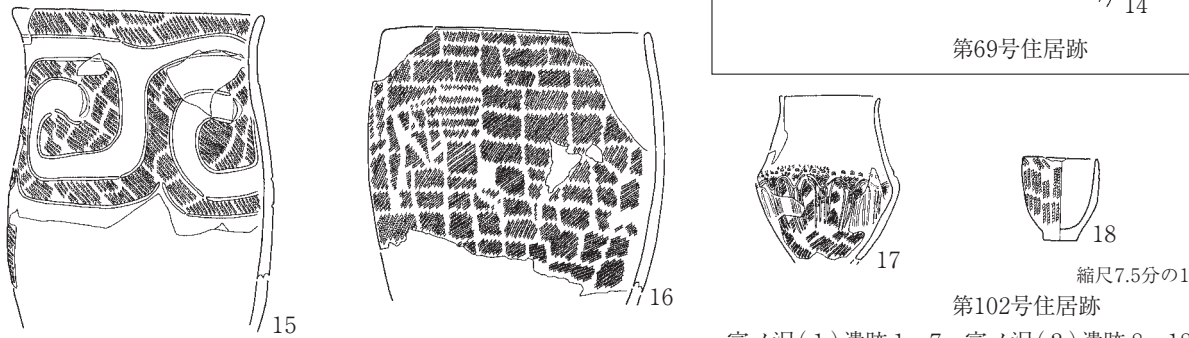
富ノ沢(1)遺跡



第56号住居跡



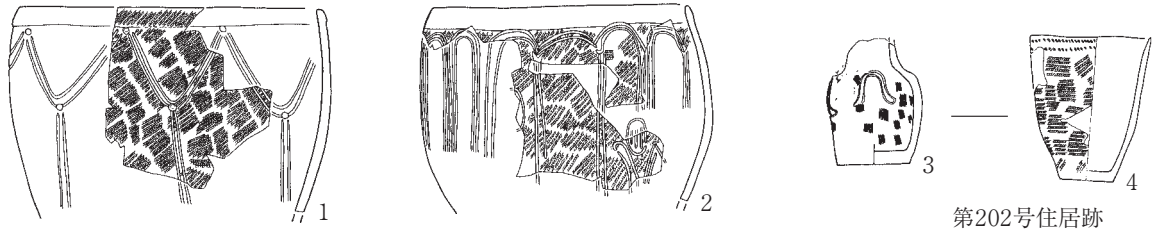
第69号住居跡



縮尺7.5分の1
第102号住居跡

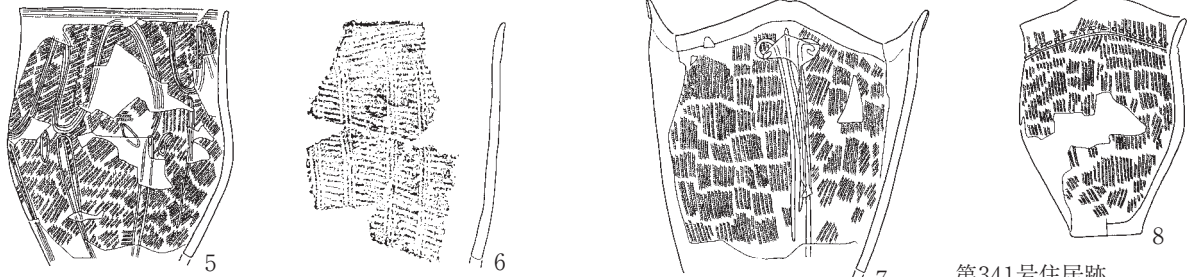
富ノ沢(1)遺跡1~7 富ノ沢(2)遺跡8~18

図3 富ノ沢(1)・(2)遺跡



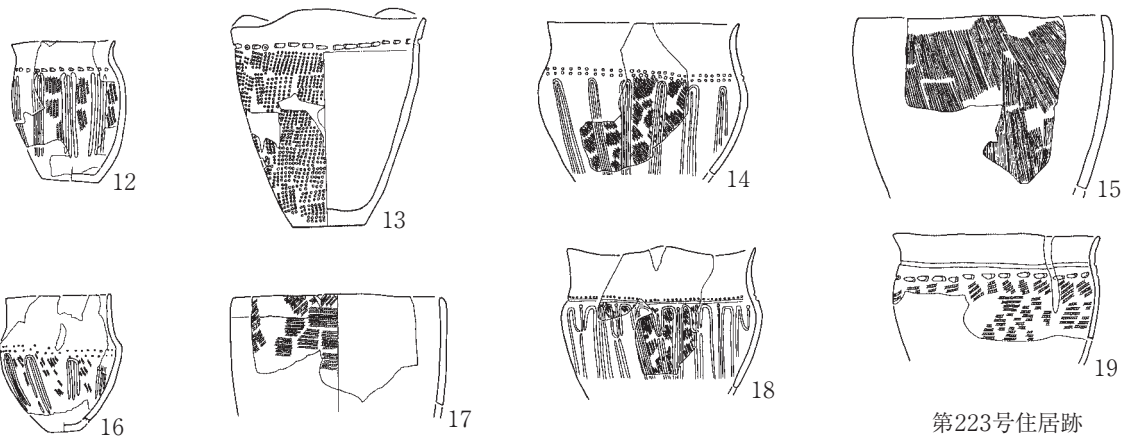
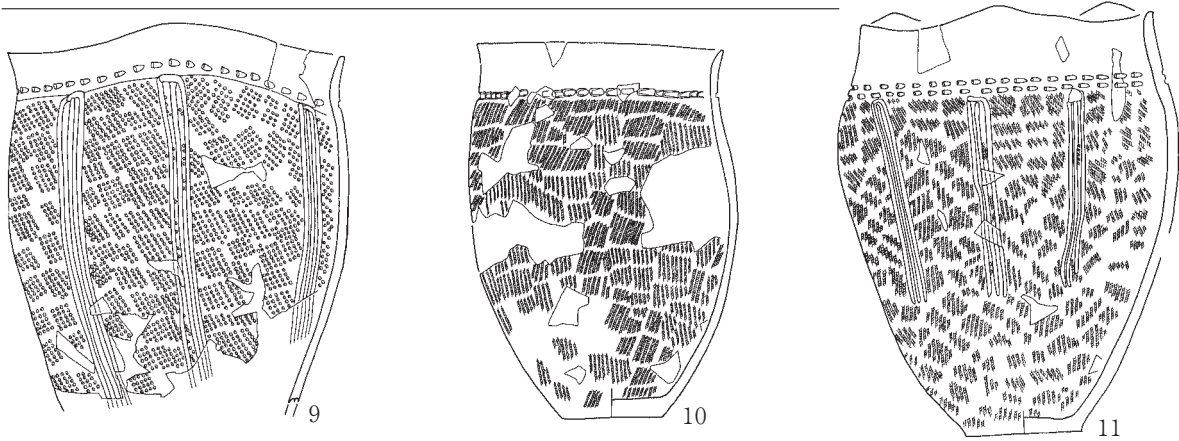
第108号住居跡

第202号住居跡

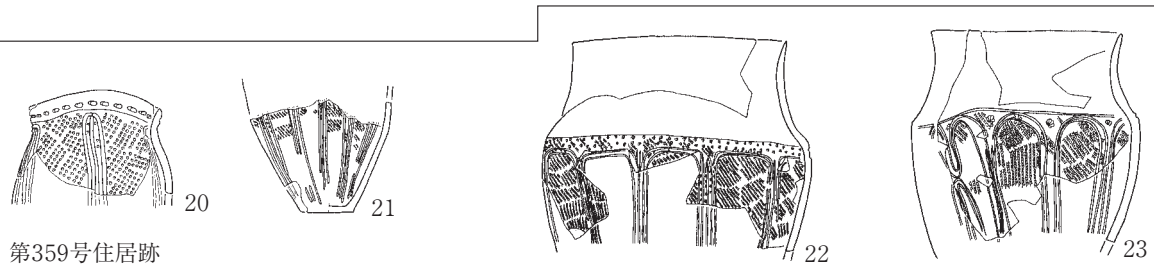


第212号住居跡

第341号住居跡



第223号住居跡

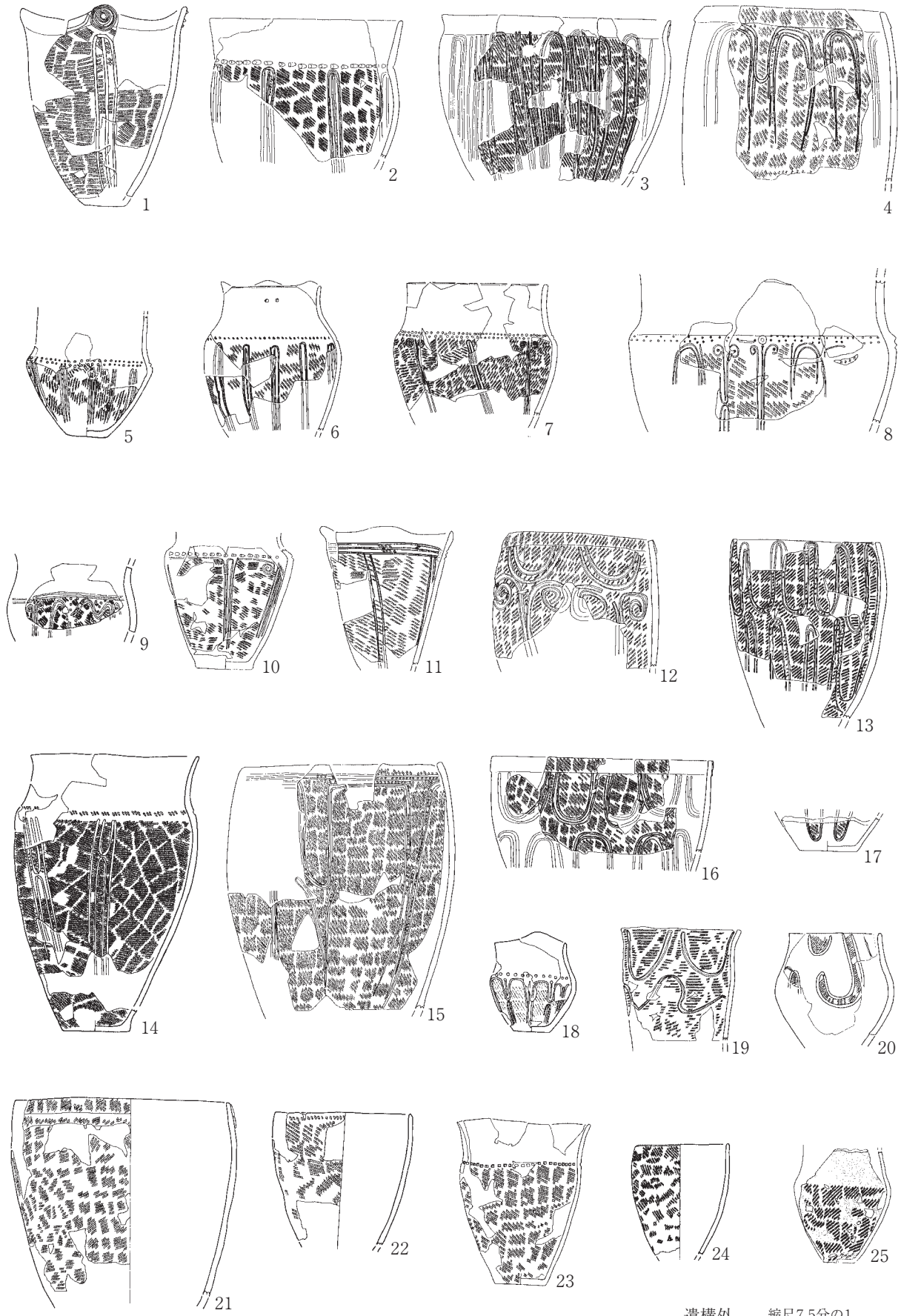


第359号住居跡

第408号住居跡

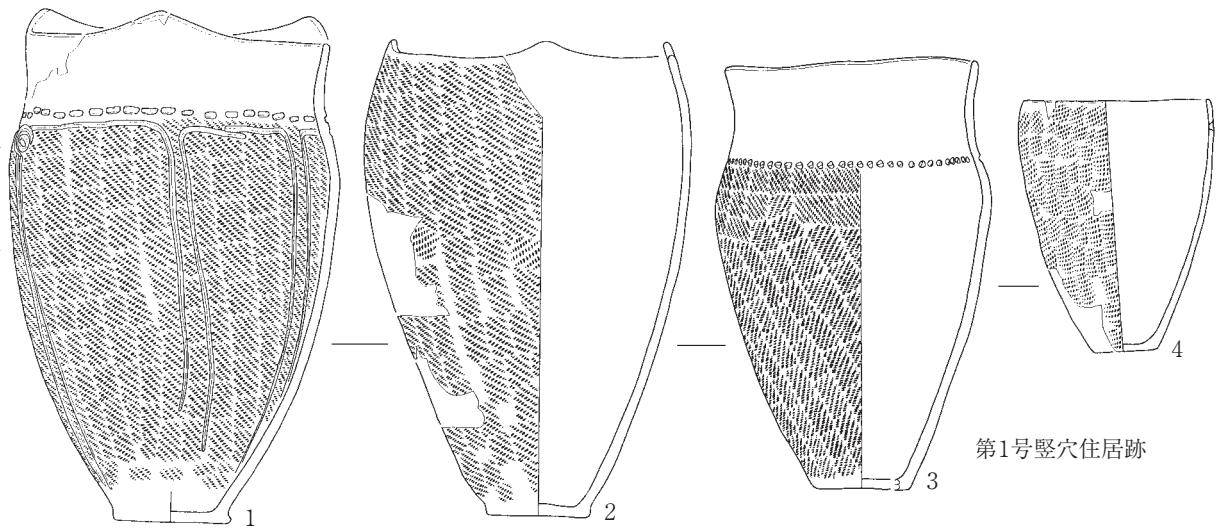
図4 富ノ沢(2)遺跡(1)

縮尺7.5分の1

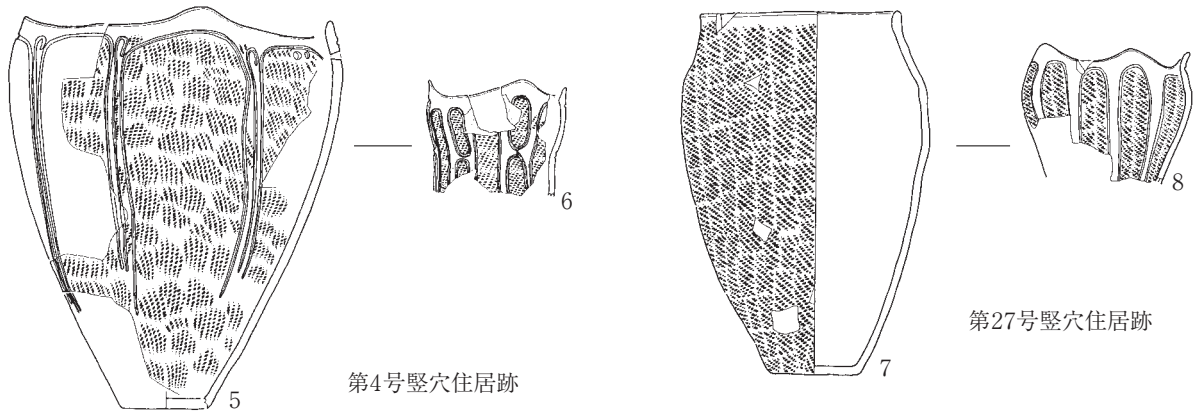


遺構外 縮尺7.5分の1

図5 富ノ沢(2)遺跡(2)

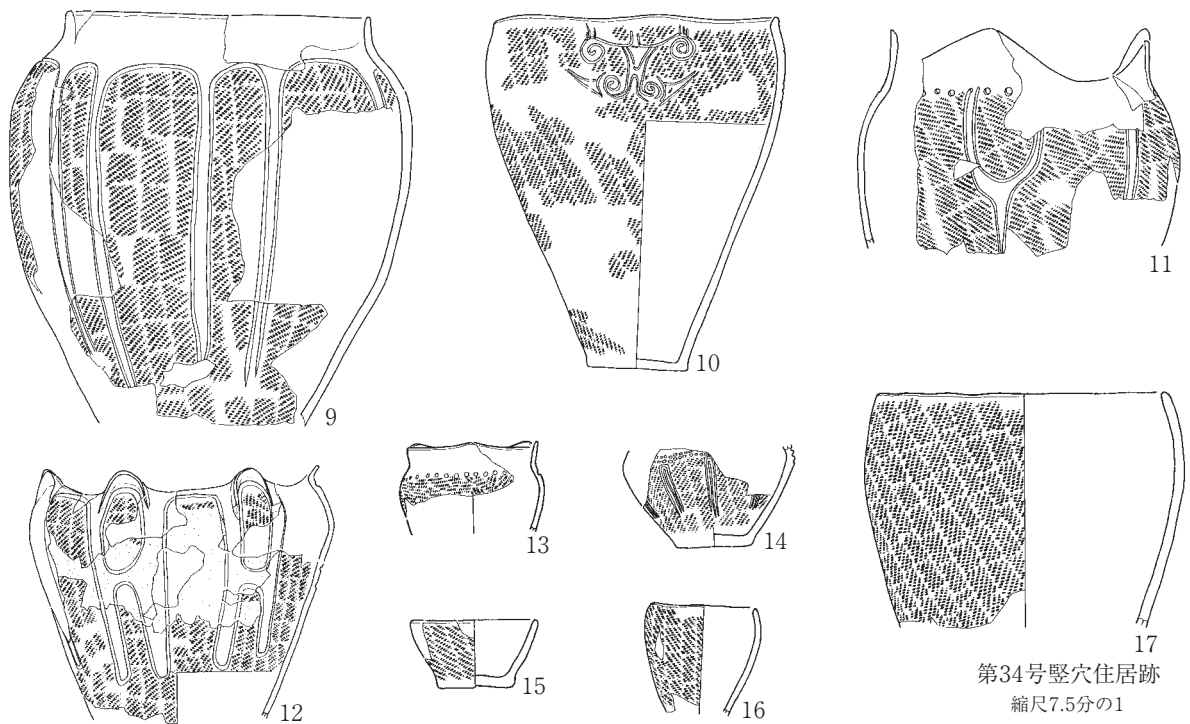


第1号竖穴住居跡



第4号竖穴住居跡

第27号竖穴住居跡



第34号竖穴住居跡
縮尺7.5分の1

図6 松ヶ崎遺跡

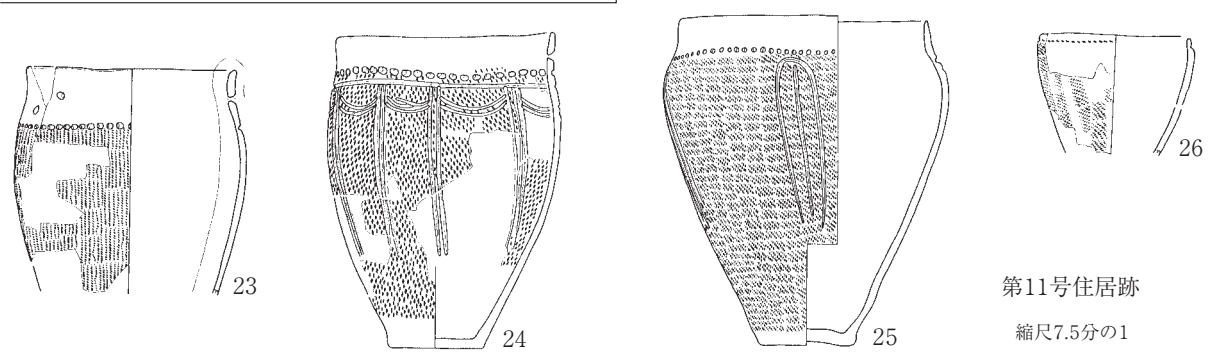
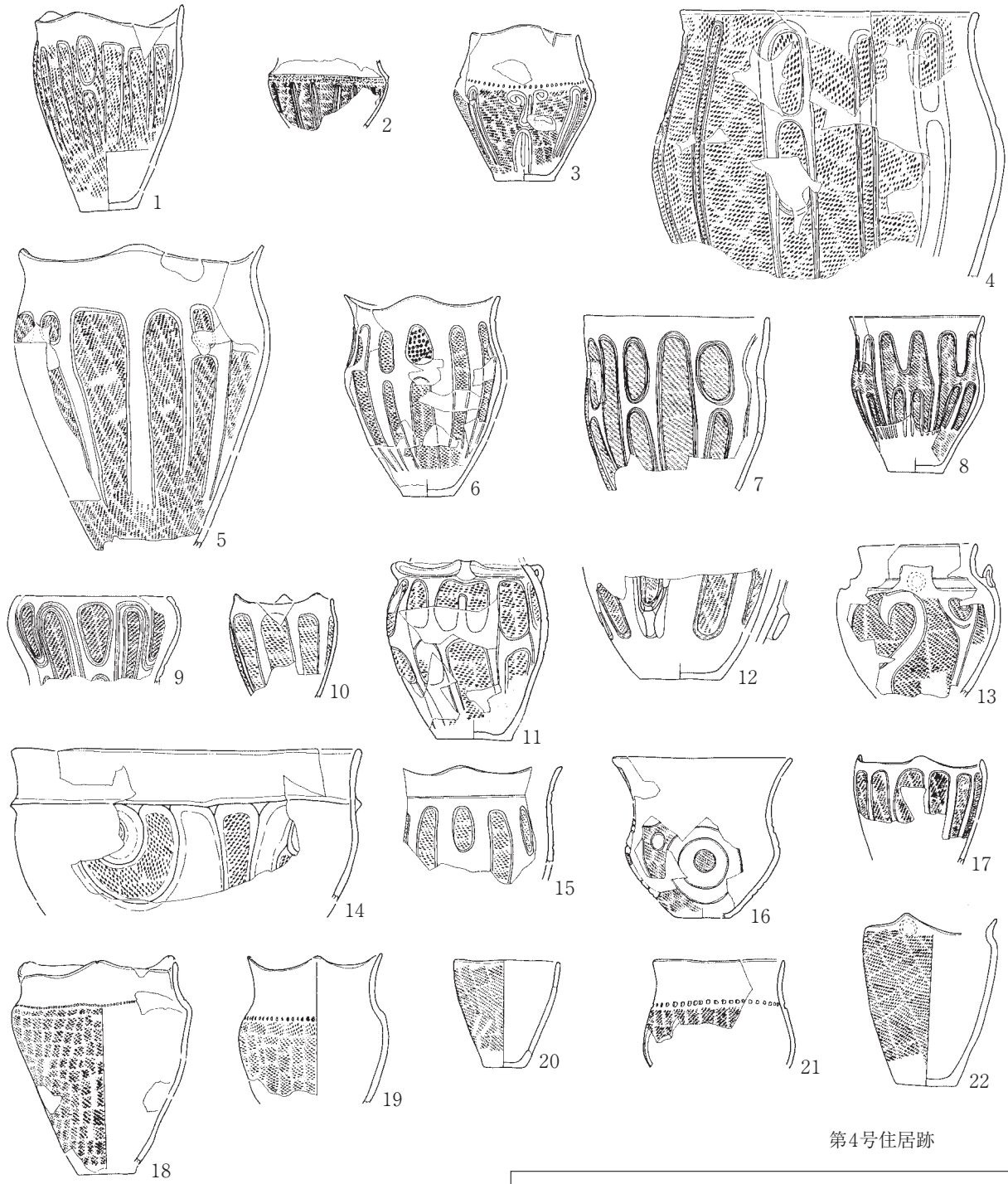


図7 西長根遺跡

5 各地域の最花式土器

津軽半島地域

三厩村中の平遺跡（鈴木1975）・今別町山崎遺跡（小笠原1982）の2遺跡を分析する。

土器の共伴関係

中の平遺跡では、遺物包含層から一括して出土しており、前段階の中の平Ⅱ式の土器が一部混入しているものの、プライマリーな出土状態をなすものである。

山崎遺跡では、最花式がA・C地区の離れた地点からまとまって出土した。特にC地区の一括遺物は、中の平遺跡の文様構成が類似しており、まとまった資料である。

なお、遺構内からはA地区の第5号住居跡の覆土（図2-10・11）及び第8号住居跡の床面一括遺物（図2-12～14）などが共伴している遺物である。

文様

中の平遺跡では、形状がA種の口頸部が内反する深鉢・鉢形であり、文様も一段の文様構成で、長楕円形文の懸垂文（図2-2）・無段の縄文（図2-5）・連続刺突文（図2-6）であり、形状及び文様のバリエーションがすくない土器群である。鈴木は、この土器を用いて中の平Ⅲ式を設定した。

山崎遺跡では、A地区の図2-11で二段のJ字状文と一段の文様構成の懸垂文と組合わさっている。交差状及び二段の文様構成の土器も出土しており、C地区と様相を異にしている。

C地区では、図2-23～27では、一段の文様構成で、蕨手文・直線文・長楕円形文を施文しており、中の平遺跡出土土器と同様なモチーフである。

上北湖沼地域

六ヶ所村富ノ沢（1）遺跡（成田・奈良1989）・富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）の2遺跡を分析する。

土器の共伴関係

富ノ沢（2）遺跡では、2ヶ所の捨て場が存在したが、層位的につかむ事ができず、住居跡内から共伴がみられる土器が出土した。

富ノ沢（1）遺跡では、88-9号住居跡の覆土の一括遺物である。

富ノ沢（2）遺跡では、第56・102・212号住居跡の床面・床直遺物、第69・108・202・223・341・359・408号住居跡の覆土一括遺物が共伴している遺物である。

文様

1段の文様構成の土器は、A種の口頸部が内反するものが主体を占める。文様は、上端が閉じ下端が開く長楕円形文と蕨手文を施文している。

2段の文様構成の土器は、A2種の口頸部が内反する広口壺形土器の形状を呈するものが少ない。文様は、上位を区画文で下位に蕨手文（図5-12）・懸垂文（図3-8）・横位蛇行文（図3-15）を施文している。また、上位を連続文で下位に懸垂文（図5-15）・長楕円形文（図5-16）を施文している。

無段の文様構成の土器は、連続刺突（図5-23）・捺糸圧痕（図5-22）・縄文（図5-24）を施文している。

馬淵川・新井田川地域

八戸市の松ヶ崎遺跡（小笠原1995・1996）・西長根遺跡（小笠原・小保内1995）の2遺跡を分析する。

土器の共伴

松ヶ崎遺跡では、第1・4・27・34号竪穴住居跡の覆土の一括遺物、西長根遺跡では、第4・10・11号竪穴住居跡の覆土の一括遺物が、共伴していると考えられる。

文 様

1段の文様構成は、地文縄文に長楕円形文を施文するものであり、地文縄文（図6-1）と磨消縄文（図6-9）がみられる。

2段の文様構成は、上位を区画文、下位を懸垂文の長楕円形文（図7-7）を施文するものが多く、磨消縄文が主体を占める。

無段の文様構成は、連続刺突・縄文・撚糸圧痕を施文している。

6 おわりに

最花式土器とは（図7）

形状は、前記で記載しているようにA～D種の形状をゆうする。

D種の台付鉢形は、鹿角市天戸森遺跡（秋元1984）のみの出土であり、地域的な強い形状である。

A種の口頸部の内反する形状は、A1種が深鉢・鉢形に多く、A2種が肩部が張り広口壺形（図7-5）におおくみられる形状であり、最花式の主体を占める形状である。

B種の内反する形状（図7-17）は、最花式では主体的でない形状であるが、（図7-30）のように極端に張りだしており、大木式のキャリパー形の影響を受けたとも考えられる。

文様は、1段の文様構成・2段の文様構成・無段の文様構成と三つの文様構成が確認される。1段は、直線及び上端を閉じる長楕円形文（図7-3）及び蕨手文（図7-2）を施文しており、全体の文様構成は単調な文様パターンである。

2段の文様構成は、上位に区画文（図7-35）・連続文（図7-19）であり、下位に懸垂文（図7-18）を組み合わせた文様である。

無段の文様構成は、口頸部のくびれ部に連続刺突（図7-38）・撚糸圧痕（図7-39）を施文しているものや、縄文のみ（図7-41）を施文しており、最花式の中では出土例が多いものである。

なお、土器の施文にあつては地文縄文と磨消縄文がみられる。磨消縄文は県南部に多くみられる地域的なものである。

器形は、深鉢・鉢形、広口壺形、台付鉢形であり、2段の文様構成の土器には、広口壺形土器は少ない。

最花式の地域の様相

今回は、津軽半島地域、上北湖沼地域、馬淵川・新井田川地域の3地区を概観した。

これらの3地域を概観すると、津軽半島地域ではA種の口頸部が内反する形状が多く、かつ一段の文様構成が多い地域であり、地文縄文が主体を占める。

上北湖沼地域では、形状がA～C種が確認されA種の形状が主体を占める。



縮尺10分の1

図8 最花式

文様は、1段・2段・無段の文様構成があり、2段では上位に区画文・連続文、下位に長楕円形文を施文しているものが多い。なお、磨消縄文がみられるものの、地文縄文が主体を占める地区である。

馬淵・新井田川地区では、1段の文様構成では長楕円形文が多く、直線状・蕨手文の施文が少ない。

2段の文様構成は、上位に区画・下位に長楕円形文の文様パターンが主体を占める。また、磨消縄文を多く施文しており、他の地域と比較すると磨消縄文が多い地域である。

3地区では、地文縄文と磨消縄文の施文の違いがみられるものの、文様施文にあっては変化はみられないと理解したい。

最花式の細別

最花式の細別に関しては、古市が三内沢部遺跡の調査例を基に第9号住居跡と第22号住居跡の様相差より時期差を設定し（古市1978）、小笠原善範は山崎遺跡の資料を中心として、第I～V段階の細別（小笠原1982）を、高橋は二区分の細別を提示（高橋1988）し、最花式の細別のころみが行われてきた。

最花式は、中の平遺跡（鈴木1975）の層位一括遺物及び山崎遺跡のC地点からの平面的な分布で出土した一括遺物が型式設定のメルクマールとなるものである（注6）。

これらは、一段の文様構成をゆうするグループの土器が出土した。

また、遺構内の共伴遺物を概観すると、一段の文様構成の共伴は、富ノ沢（2）遺跡の第69号住居跡（図3-11～14）、第359号住居跡（図4-20～23）である。

2段の文様構成の共伴は、富ノ沢（2）遺跡の第56号住居跡（図3-8～10）、第108号住居跡（図4-1・2）である。

これらのことから、一段の文様構成と二段の文様構成とは、独立した文様構成をもつグループであり、古市が指摘した時期差として捉えるべきであろうか、高橋は二段の文様構成→一段の文様構成の変遷を期しているが、山崎遺跡の第5号住居跡（図2-11）、富ノ沢（2）遺跡の第102号住居跡（図3-15）の土器は、上端が開口したJ字状文であり、区画の波頭状文が未発達のものである。従来の編年では大木10式併行期の範疇に属した土器である。

今回、共伴の遺物を精査した所、一段の文様構成（図2-10・図3-17）の長楕円形文と共伴するにいたった。

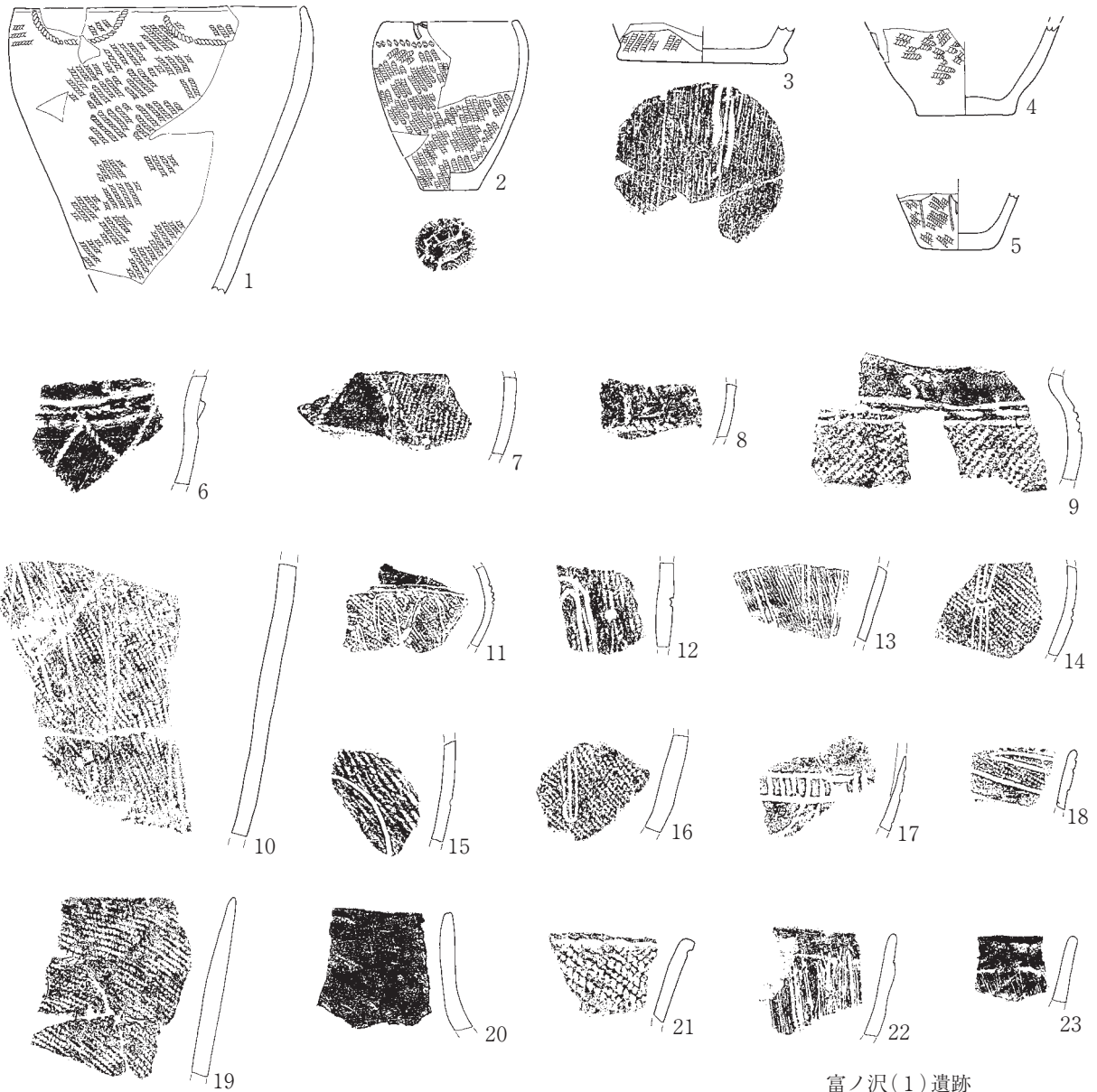
つまり、一段の文様構成のグループが最花式の後半段階に位置づけられ、二段→一段の文様構成の変遷も十分に考えられるところである。

しかし、最花式の細別に関しては、今後更に資料を吟味して再検討したいと思う。

最花式もどきについて（図9）

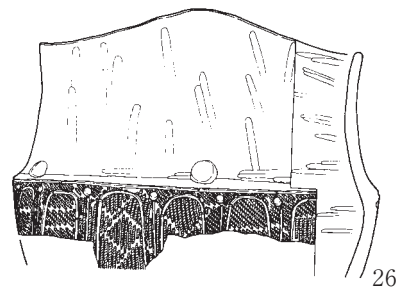
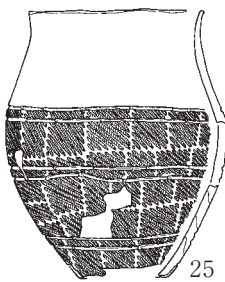
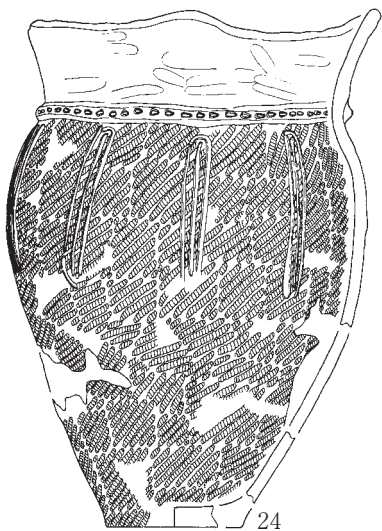
当該地域には、在地式的最花式の土器以外に、他地域の土器形式の文様要素を一部取り入れた土器が存在する。

それを筆者は、この土器群（似てるようで・似ていない土器群）を**もどき**（注7）という用語で表したい。



富ノ沢(1)遺跡
88-9号住居跡

縮尺3.75分の1



大船C遺跡
縮尺4.5分の1

図9 最花式もどき

海峡を挟んで、青森県地域と道南地域のもどきの土器を検証したいと思う。ところで、本県の現状は、北海道の余市式土器の関連及び併行関係が、いまだ不明な点が多い。

このことは、本県からの出土例が少ない点があげられるが、六ヶ所村の富ノ沢（1）遺跡（成田・奈良1989）の88-9号住居跡からの出土資料が、余市式を検討するのにあたって、注目される土器群と思われる。

住居跡からの出土例は少ないが、図9-1・6・9は床面・床直の土器であり、他はすべて堆積土中からの出土遺物である。文様は一段の文様構成を主体としており、他型式を介在しない短期間の廃棄による一括遺物と考えられる。

土器の文様構成で、注目される点は捺糸圧痕の土器である。図9-2は横位に一条の捺糸圧痕を施文、最花式に普遍的にみられる土器である。一方、図9-1・6の弧状及び連続した文様及び斜位で圧痕した鋸歯状文を施文している土器は、最花式の捺糸圧痕と様相を異にする土器群である。

これらの捺糸圧痕を多様する土器を、筆者は余市式の影響を受けた一群の**もどき**の範疇と考えている。

一方、北海道の道南では、函館市西股遺跡（松下他1974）・南茅部町大船C遺跡（阿部1998）において最花式が出土しており、最花式と最花式もどきの二つのタイプが確認される。

最花式は、図9-26であり、口縁部が無文化され、肩部に区画線を用いて胴部文様帯を構成しており、地文縄文に縦位方向に懸垂文を施文している（注8）。

一方、最花式**もどき**の土器は、図9-24がくびれ部に粘土紐を巡らし、長楕円形文（下端を閉じる）の土器である。図9-25は、3段に2状の横位沈線を巡らす土器などが、最花式**もどき**であると解釈したい。

そうすると、道南では在地式の土器群（余市式）・最花式・最花式**もどき**という3つのグループが確認され、大木9式もどきの3つのグループが確認される。

つまり、一時期の土器型式には主体的な系統の土器群（在地式）の他に客体的なもどきが存在し、それらが一体となって一つの土器型式を形成していると考えたい。

最後に、紙数の関係で県内の三地区を選択し分析したが、他の陸奥湾地区・下北半島地区・津軽地区・米代川流域地区等の多くの地区を分析することができなかった。

今後、これらの地域も含めて最花式を再検証していきたいと思う。

注

注1 江坂輝彌氏の土器型式の混乱は、27ページ第6図で提示した「後期初頭の土器」（本文では説明が無い）が、円筒土器の範疇に入る土器であり、型式認識に混乱がみられる。

なお、橘氏が設定した最花式の認定にも江坂編年の影響を与えたというのは、筆者の飛躍した考えであろうか。

注2 小笠原善範（小笠原1996）は、報告書で松ヶ崎遺跡と西長根遺跡とは同じ遺跡ではないかと記載しているが、筆者も同一の遺跡と理解しており、その規模から県南最大の拠点的な集落と考えられる。

- 注3 平成4～6年の青森市三内丸山遺跡の調査では、遺物包含層及び盛土の調査で大量の中期後葉の遺物が出土したといわれている。未報告分が多いが、土器型式に新しい息吹を与えてくれるものと、その公開に期待しているところである。
- 注4 この様な柳沢清一氏の誤った認識は、一部の混在した状態（本文のゴシック体は筆者作成）という文章から判断した考え方と思われるが、根拠とはならないと筆者は考えている。
- 注5 柳沢清一氏のS I 71号住居跡の新旧関係には、誤認がみられる。また、実体験から遺構内の激しい重複関係は、ときとして判断を誤らせる事が多い。
- なお、八戸市弥次郎窪遺跡の出土土器を全面に用いている事に関しては賛同できない、数片しか出土していない資料を全面引用し、型式の指標とすべきは混乱の原因となるからである。
- 注6 遺物の平面的な出土分布を押さえる事は、山下遺跡（中村1999）の廃棄ブロック（S T 1～3）の調査で十腰内I式の時期差をおさえる事ができた。そのため、層的に出土しない現在において、時期差を把握する有効な方法の一つと考えている。
- 注7 もどきという用語は、林謙作が亀ヶ岡式土器の施文手順と相異なる土器を亀ヶ岡もどきとして用いている。
- 筆者は、土器に施される文様及び施文技法が、在地の土器群の系譜と異質であるという意味で使用している。
- 注8 道南の最花式の広口壺形土器の器形を呈するものが多い。このことは、本県の大木7b式が浅鉢形が主体にみられる事と相似しており、最花式の段階で、ある器種のみが海峡を越えた事も考えられるのである。

引用・参考文献

- 秋元 信夫（1984）『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26 鹿角市教育委員会
- 阿部 千春（1998）『大船C遺跡』南茅部町教育委員会
- 江坂 輝彌（1970）『石神遺跡』ニューサイエンス社
- 小笠原 善範（1995）『松ヶ崎遺跡第2次調査』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 八戸市教育委員会
- 小笠原 善範（1996）『松ヶ崎遺跡第2次C地点』八戸市埋蔵文化財調査報告書第65集 八戸市教育委員会
- 小笠原 善範・小保内 祐之（1995）『西長根遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 八戸市教育委員会
- 小笠原 幸範（1982）『今別町山崎遺跡（1）・（2）・（3）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集 青森県教育委員会
- 小笠原 好彦（1974）「円筒式文化の崩壊とその意義」東北の考古・歴史論集 宝文堂
- 小笠原 雅行（2002）「最花式土器 雑感」研究紀要第7号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 熊谷 常正（1982）『岩手の土器』岩手県立博物館
- 鈴木 克彦（1975）『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 青森県教育委員会
- 鈴木 克彦（1976）「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」北奥古代文化第8号 北奥古代文化研究会
- 鈴木 克彦（1989）「縄文土器大観 1 最花式（中の平Ⅲ式）土器」小学館
- 鈴木 克彦（1996）『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
- 鈴木 克彦（1998）「東北地方北部の縄文中期後半の土器」研究紀要第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 高橋 潤（1988）「北部東北地方の縄文中期終末に於ける土器編年試案（1）」燃糸文第16号 青森山田高等学校考古学
研究部
- 橘 善光（1978）『最花貝塚第1次調査報告』むつ市文化財調査報告第4集 むつ市教育委員会
- 橘 善光・奈良 正義（1980）『最花貝塚第2次調査報告』むつ市文化財調査報告第6集 むつ市教育委員会

- 橘 善光他（1983）『最花貝塚第3次調査報告』むつ市文化財調査報告第9集 むつ市教育委員会
- 橘 善光・奈良 正義（1986）『最花貝塚発掘調査報告（第4次）』むつ市教育委員会
- 田中 琢（1978）「型式学の設定」日本考古学を学ぶ（1）有斐閣選集
- 富樫 泰時（1981）「縄文土器大成2 中期 東北地方」講談社
- 中村 哲也（1999）『山下遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第258集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦・奈良 昌毅（1989）『富ノ沢（1）・（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第118集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦・奈良 昌毅（1991）『富ノ沢（1）・（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第133集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦他（1992）『富ノ沢（2）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦（1993）『富ノ沢（2）遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集 青森県教育委員会
- 丹羽 茂（1989）「中期大木式土器様式」縄文土器大観1 小学館
- 林 謙作（1965）「日本の考古学Ⅱ 縄文時代 東北」河出書房新社
- 林 謙作（2001）「亀ヶ岡と亀ヶ岡もどき」縄文社会の考古学 同成社
- 古市 豊司（1978）『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 青森県教育委員会
- 松下 亘他（1974）『西股』北海道第四紀研究会
- 宮 宏明（1981）「ノダップⅡ式土器の検討」考古学研究第28巻第3号 考古学研究会
- 村木 淳（1994）『松ヶ崎遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集 八戸市教育委員会
- 村越 潔（1974）「円筒土器文化」雄山閣出版
- 柳沢 清一（1991）「『榎林式』から『最花式』（中の平Ⅲ式）へ－陸奥中期後半編年の再検討－」古代91号 早稲田大学考古学会

エックス線透過撮影の各種遺物への利用

白鳥文雄

1 はじめに

青森県埋蔵文化財調査センターでは、出土遺物の保存処理のため、平成10年度から三ヶ年にわたって各種機器の導入及び付帯施設の整備を行った。

この事業の一環として、平成12年度に金属製品非破壊内部調査のための軟エックス線透過撮影装置を設置し、さらに撮影後のエックス線フィルムから、画像の鮮明化及びより必要な情報を得るためにパーソナルコンピュータ（以下、パソコン）による画像処理システムを併用することにした。

エックス線装置は、前述のとおり主に錆に覆われた鉄製品の内部構造を調査するために設置したが、装置自体が高価なこともあり、より有効な活用が無いかとの見地から、他機関と同様に、鉄製品以外の各種遺物に対しても内部構造の撮影及び画像処理を試みた。

本稿では、設置後二ヶ年における成果の一端を紹介したい。

2 対象遺物と撮影条件等

透過撮影の対象は、金属製品、特殊な土器、土偶、土製品、石製品、木製品などであり、これらは基本的にはエックス線による透過撮影が可能と考えられるが、金属製遺物においては、錆や腐食により本来の金属部分が著しく劣化しているものや、これらを含む土壌の酸化（錆化）構成物質に覆われているものについては判定が不可能に近いものもある。また、水浸け状態の木製遺物は、水分がエックス線を吸収するために映像が不鮮明なものとなり不適である。

エックス線透過撮影においては各種遺物ごとの撮影諸条件の適正化も必須要素であるため、標準的な遺物を選定し、エックス線の出力（電圧・電力・時間）・フィルター・エックス線フィルム（感度・増感材等）について基本的な条件を設定した。

画像処理は、撮影後のフィルムを透過型スキャナーによりパソコンに取り込んだ後、モノクロ映像であることから「コントラスト」・「明るさ」の調整を基調にし、「トーン・コントロール」及び「フィルター」処理等によって鮮明化及び最も必要な情報を強調することにした。

これらの条件のもとに種々の方法を組み合わせて試行した。

3 利用事例（成果）

紹介する事例は、土器の成形方法、特殊な土器の内部、土偶の内部穿孔状況、石製品の穿孔方法、木製品の接合（目釘）である。また、古銭の銭名確認にも成果があったためこれも紹介したい。

（事例における県埋文報〇〇集は青森県埋蔵文化財調査報告書第〇〇集の略である。）

土器の成形方法

異形土器（写真1） 青森市三内丸山（6）遺跡出土（県埋文報327集、図37-2）

片口土器の類と考えられる土器で、報文では水鳥形土器としている。完形品のため内部の状況が不

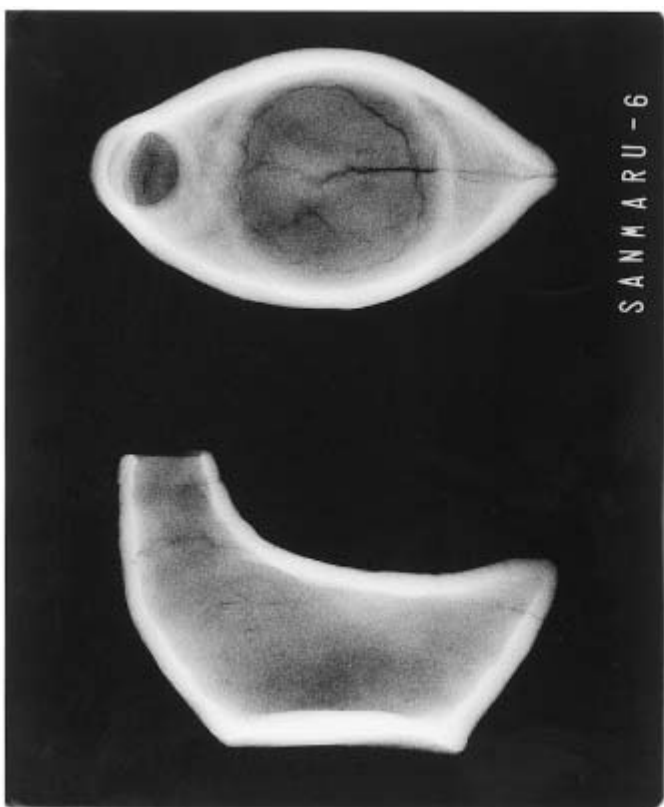


写真1

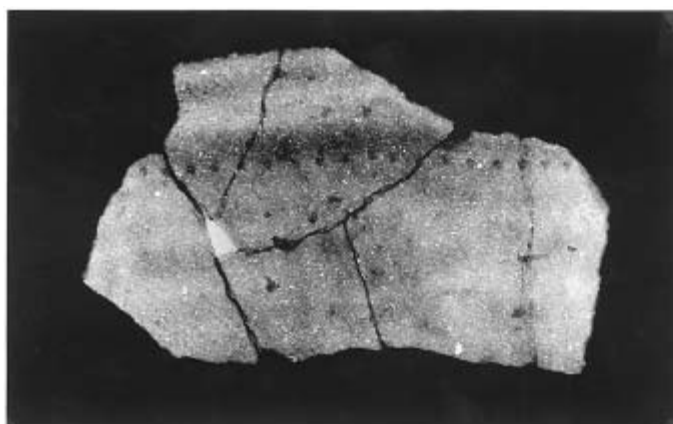
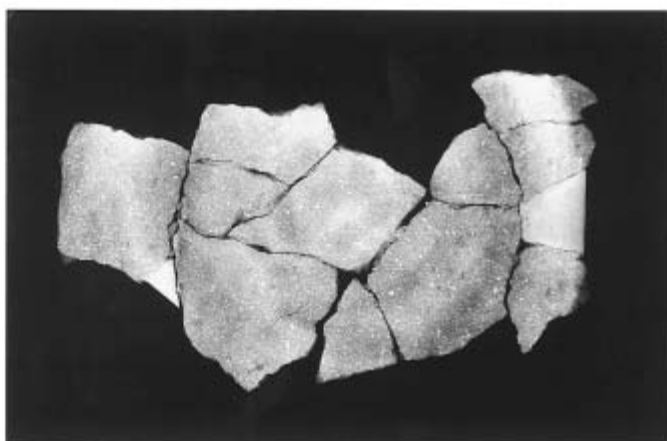


写真2

写真3



明なことから撮影を行った。その結果、以下の成形工程が判明した。

まず、通常の深鉢形土器の胴部下半と同様に成形したものを両側から押しつけて開口部を楕円形に成形し、注口部以外の部分に粘土板を接合する。さらに注口部を筒状に積み上げて接合したと考えられる。特徴的な尻尾状の部分はごく一部分での接着のようである。

縄文時代草創期多縄文土器 (写真2・3) 八戸市櫛引遺跡出土

(県埋文報263集、図151-1、図156-8)

対象資料は非常に薄手の土器片で、櫛引遺跡の報告で小田川氏は「概ね、巻き上げによるものであると考えるが、粘土板によるものも若干あるようである。」と記述している。また、同時期の室谷洞穴遺跡の多縄文土器は粘土板による「箱作り」の技法で作出されたようである。

当該時期の出土土器は大変少ないことから数点の透過撮影を行った。この内、大型の破片2点を紹介する。写真は、厚い部分ほど白く、薄くなるにしたがって黒く写っている。

この結果、明瞭な接合部の痕跡は確認できなかったが、2は口縁部～胴部破片で、粘土紐による直線的な単位での接合痕跡が確認できた。3は底部破片で、粘土紐を渦巻き状に巻き込んでいることが確認された。3の両端が肉厚に写っている部分は胴部下半の器壁が重なっているためである。

数点の観察であるため全体を論ずることはできないが、多縄文土器の製作技法の一端がかいま見れたものと考えられる。

特殊な土器の内部

動物形内蔵土器 (写真4) 青森市近野遺跡出土 (県埋文報33集、図87-8)

壺形土器の底部内面に動物形土製品が貼り付けられている土器で、完全なものは全国でもこの1点である。動物形土製品の貼り付けられた底部破片は青森県内では六ヶ所村上尾駱(2)遺跡から3点出土しているが、すべて腹這いであり、底部に密着しているようである。

撮影の結果、土器内部の動物は完全に四肢を張り、腹部を底部から離している状態が確認され、他の3点とは貼り付け方が異っていることが判明した。

土偶 (写真5) 青森市朝日山(2)遺跡出土 (県埋文報325集、図192-1)

土偶は、他機関においてもエックス線撮影の対象となっており、特に縄文時代晩期の遮光器土偶は製作技法の研究対象になることが多い。

青森県内では、近年、三内丸山遺跡をはじめとして板状土偶の出土が多く、研究レポート等にも透過撮影写真が少なからず使われている。

紹介資料は、縄文時代中期の肉厚な作りの板状土偶で、顔面の表現もより具象化されたものである。足下に穿孔が見られたことから撮影を行った結果、口まで一気に空けられた孔がみられた。

石製品の穿孔状況 (写真6) 六ヶ所村上尾駱(2)遺跡遺跡出土

(県埋文報115集、494図-1・2)

ヒスイ大珠の穿孔状態の把握のために透過撮影を行った。

写真4

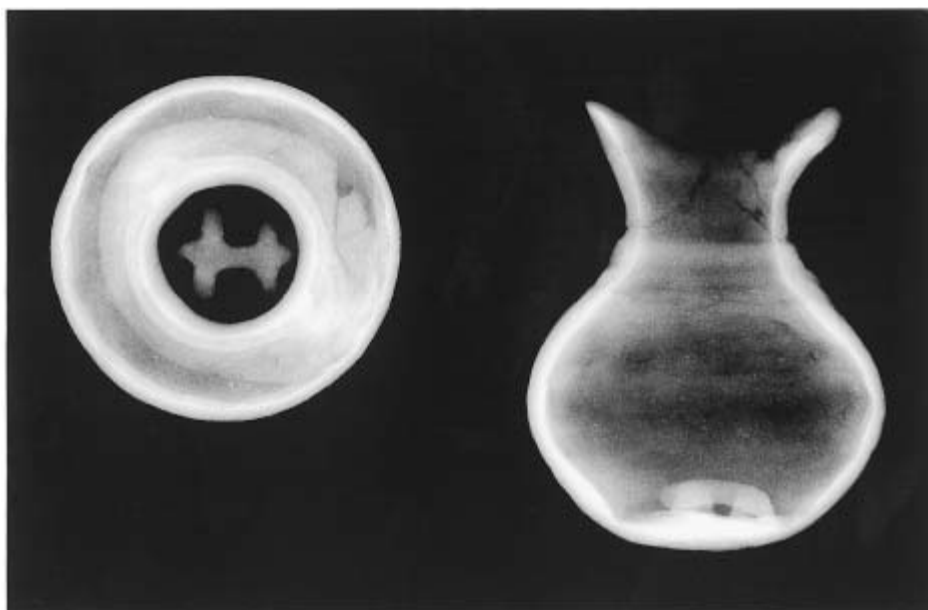
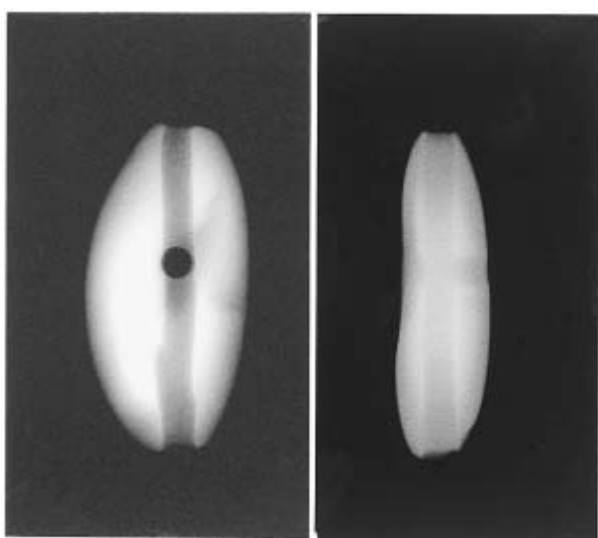
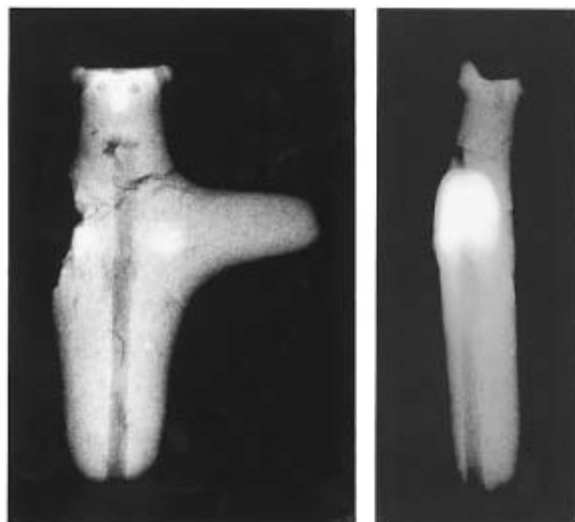
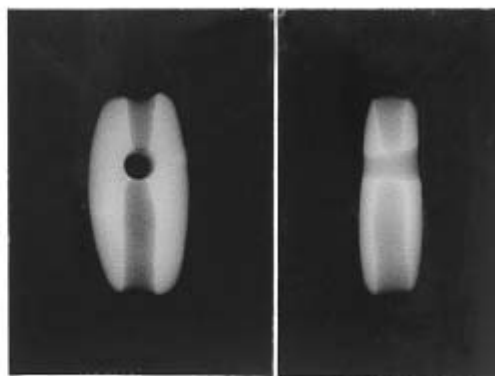


写真5



A



B

写真6

孔は先端部寄り（深奥部）が細くなっている傾向がみられる。

Aは上下及び表裏面から穿孔されているが、上下方向の孔は途中でくい違いが見られる。素材が非常に硬質であることから穿孔途中で方向を変えるのは容易ではないと思われることから、このズレは穿孔角度の違いの結果によるものと考えられる。

木製品（底板）の接合（写真7） 五所川原市隈無（8）遺跡出土（県埋文報313集、図27-2、
図29-1）

撮影資料は、近世の曲げ物または手桶の底板であるが、内部組織の損傷が少ないことから鮮明な影像を取得することができた。接合のための目釘及び目釘穴がよく観察できる。

（報告書中でのエックス線写真はフィルムの階調を反転（ネガ→ポジ）し、より実物的な釘穴の空隙を強調したものである。）

古銭の銭名確認（写真8） 五所川原市隈無（8）遺跡出土（県埋文報313集、図45-18）

近世の墓坑から出土した六道銭である。数枚は劣化が少なく銭名を確認できたが、他は表面の錆が分厚くなっていったため確認が困難であった。拓本採取のため、担当者から表面のクリーニングを依頼されたが、錆の硬化が著しく、地金を損傷しかねない状態であった。

このため、地金と銭名部との厚さの違いをコントラストで出せないかとの考えから、透過撮影を行い、パソコンに取り込み画像処理を行った。この結果、銭名は不明瞭ながらも字体が推定できるようになり、古銭の拓影集との比較で銭名確認が可能となった。

4 まとめ

今回紹介したもの以外にも、種々の遺物の成形法や内部構造の調査にエックス線透過撮影を行っており、それなりの成果はあがっている。また、パソコンでの画像処理は画像の鮮明化もさることながら、必要な情報を抽出するために非常に有効である。

前述の古銭のように一部の情報（たとえば銭の実際の径など）は犠牲になるものの、今必要とする銭名という情報を確実に得ることが可能である。

このように、エックス線透過撮影（装置）は画像の処理と併用することによって、単に透過撮影での内部構造調査だけでなく、いわば汎用機器としての活用が可能となるものと思われる。

また、画像はプリントアウトすることにより、これまで透写台上でしか見られなかったものを写真として確認できることも大きなメリットである。

今後も、発想法を豊かにして新たな活用を心がけていきたいと思っている。

また、現在試行しているのは奈良文化財研究所の光谷拓実氏との会話から発想したもので、保存処理前の水浸けされている板材（奈良期以降）等の撮影である。撮影されたフィルムが年輪年代測定の資料として活用できれば、資料または人的な移動が少なくなり、逆に多くの資料が行き来できるものと考えている。大きな問題は、水分がエックス線を吸収することと、透過画像であるため表裏の陰影（年輪）が重なることである。水分の問題は一時的に略乾燥状態にすることで、ある程度は補うことが可能となったがまだ不鮮明である。まだまだ勉強不足でエックス線の特性も理解していない状況である

ため、諸賢のご指導を乞う次第である。

透過型スキャナー及び画像処理については、奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏からのご助言によるものである。記して謝意を表するものである。

装置の概要

- | | | |
|--------------|---|---|
| エックス線装置 | － | YXLON International 社 (旧フィリップス社) 製 SMART 160E |
| フィルム現像機 | － | ニックス社製 マックスライン MR-PC |
| 画像処理用パソコン | － | Apple 社製 Macintosh |
| 画像 (フィルム) 読込 | － | EPSON 社製 透過画像ユニット搭載スキャナー |
| 画像処理ソフト | － | Adobe PhotoShop |

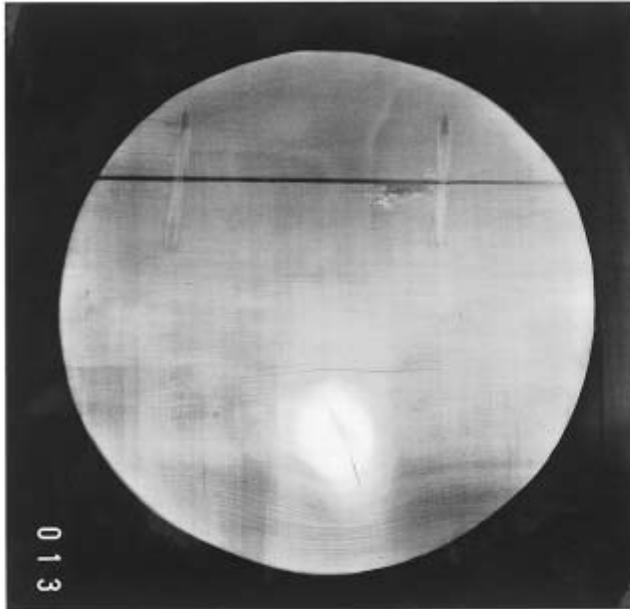


写真7

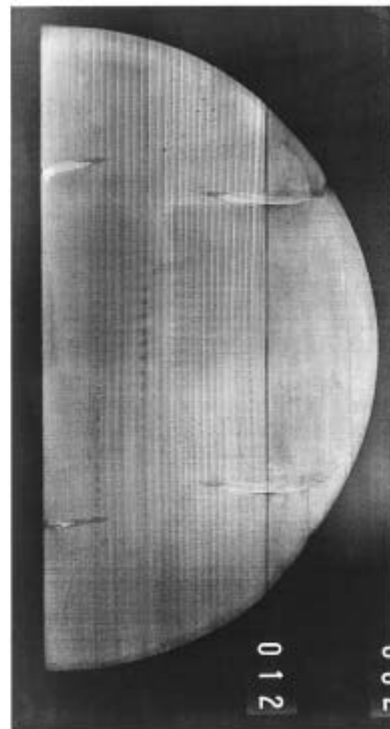
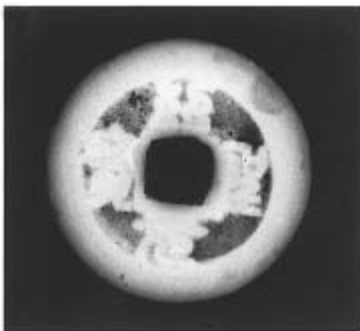


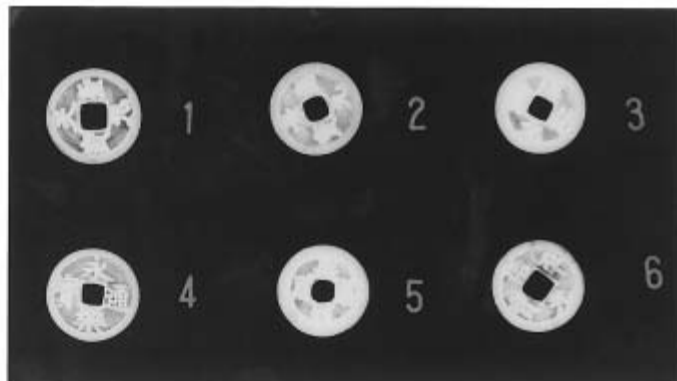
写真8



右の写真 No.5 を
180° 回転



『新版 中世出土銭の
分類図版』より転載
永井久美男 著 2002



自然科学的分析一覽

白鳥文雄

1 はじめに

青森県教育委員会がいわゆる「行政発掘」をはじめから今年度で30周年を迎え、2002年3月現在で刊行した青森県埋蔵文化財調査報告書（以下、県埋文報と略す。）も338集を数えるにいたった。

報告書の記載内容は、当然のことながら、考古学を専門領域とする担当者による遺構・遺物に関する事実記載及び分析・考察が主体であるが、自然科学領域の研究者による遺跡の自然環境や出土遺物の素材・年代測定などの分析も重要な要素となっており、近年、本県の報告書においても自然科学分析の占めるページ数が増加している。

自然科学的研究方法の考古学への応用は、土器・石器中心の研究だけでは知り得なかった情報（目に見えない隠れた情報）を明らかにすることによって、古代人の生活をより垣間見る機会を与えてくれているが、その反面、これら貴重な情報に対し考古学サイドの研究者がどういう姿勢で対応していくかが問題となってきている。

特に全国的な注目を集めた「三内丸山遺跡」の調査時から、考古学分野はもとより他領域の多くの研究者が自薦・他薦を問わず種々のテーマを携えて研究に参加され、最近はさらに多くの自然科学分野の研究者が県内の発掘調査に関わる研究を進めるにいたっている。

これら自然科学的分析は考古学においても多大な成果を上げているが、このような多くの研究者の参加は、ひとつのテーマに対しても分析法や処理方法における過程の違いなどが見られるようになり、成果（データ・分析値など）を一概に比較できない状況になってきている。

このため、まず県内の自然科学的分析結果を整理・検討する必要があると考え、その初めとして、個々の成果を集成・再考する前段階の基礎資料として一覧表を作成することとした。

これまで本県で、自然科学的分析の成果を集成したものとしては、木村真明氏による「青森県放射性炭素年代測定結果一覧表」（注1）と木村鐵次郎氏・小田川哲彦氏・坂本真弓氏によるデータ（CD-ROM）（注2）がある。特に後者は市町村刊行報告書も含め、一部欠落（調査漏れ）がみられるものの、県内の自然遺物分析についての多くを網羅している労作である。

本稿では、一覧表の記載とともに、これまでの考古学サイドの対応と問題点を述べてみたい。

注1 研究紀要 第1号 青森県埋蔵文化財調査センター 1996

注2 第50回 埋蔵文化財研究集会 試料データベース 埋蔵文化財研究会 2001

2 自然科学的分析に対する考古学研究者の姿勢

まず、これまでの報告書における自然科学的分析への対応はどうであったのだろうか。

考古学の研究者は、自然科学的手法の分析結果を無批判に受容してきた傾向が強い。これは筆者も含めて、理科系が不得手という人が多いという理由もあるかと思われるが、依頼した分析についても結果だけを重視し、分析法についてはあまりにも関心を払わなすぎたきらいがある。

また、この分野への分析を依頼したら「何か、良い情報が得られるのではないか」という丸投げに似た感覚もあったのではないだろうか。

このため、今になって考えてみれば少し突飛な分析結果をもそのまま受け入れてきた感がある。

最近ではこれら自然科学分野の研究者間で、分析結果並びに方法論などについてお互いに批評がなされ始めているが、これとて、ある結果及び事象を誰かが批判すれば、その批評成果をまた考古学の研究者は鵜呑みにしてしまう傾向があるようである。これはとりもなおさず、どちらが正論なのかという判断が付かないからなのではなかろうか。

考古学の研究者は、このような傍観者的な立場に留まらず、少なからず科学的分析法について興味を持って、学習すべき体質に改めなければならないのではないだろうか。

また、本県だけではないが、長年にわたり報告書の巻末に「自然科学的分析」として一章をくくり、一括掲載するだけで、「調査結果のまとめ」にも内容が反映されていない報告書も多く、分析を行った研究者の不評をかっていのも事実である。

さらに、報告書の章及び節の構成から、依頼原稿における「タイトル」・「論文」名が変更されているものが相当数見られたが、これも各執筆者の了解を得て行ったものは少ないと思われ、今後、安易な分析タイトルの変更は慎むべきと考える。

このような考古学サイドのこれまでの取り組みに対し、自省も込めて提案するものである。

3 分析における問題点等

依頼頻度の高い2項目について気になる点を列記する。

(1) 石器の石質鑑定

石質鑑定は肉眼的観察によるもので、長い間、地質学研究者の松山力氏、山口義伸氏に依頼して行ってきたが、近年の発掘量の増加に伴い、同業の佐々木辰雄氏にも依頼し、膨大な石器の鑑定をお願いしている。

最近気付いたことは、石材の種類が増加していることである。基本的な石種は同様であるが付帯的な「〇〇質」が多くなった傾向がみられる。これについて何かの機会にどなたか、本紀要にでも「県内の石材」について説明していただけないだろうか。お断りしておきますが決して先生方を非難しているわけではないことを明記しておきます。

(2) 14C年代測定

長期にわたり学習院大学の木越邦彦氏に依頼してきた β 線計数法と、最近の加速器による質量分析法による測定があるが、後者は分析試料が少量ですむことや測定期間が短いことから近年、応用が進んできている。ただし、前者が後者より劣っているということでないことは周知のとおりであり、試料により方法を選別すべきものとする。

また、近年は同位体比やこれによる補正年代値の記載も多くなり、暦年代の付記も行われている。今後必要とされるデータとしては、14C年代と補正14C年代及び同位体比による $\delta^{13}C$ 値であることから、当該年代測定の依頼においては、上記数値の併記をお願いすべきである。

その他として、中・近世の試料の14C年代測定は、縄文時代などとは異なり、実年代として論じられる短い時間尺の中にあり、測定誤差の中に時代の区切りが包含されてしまっている。したがって、

いたずらに中世のものか近世のものかを探る手段として測定依頼するのはいかなるものであろうか。
(3) 上記2項目以外にも、黒曜石の産地基礎データの増加による比定地の再検討、須恵器の胎土分析における生産窯ごとの分析の可能性など、問題点は多々あるが、紙面の都合上、稿を改めて述べたいと思う。

4 一覧表について(凡例に代えて)

今回、一覧表に掲載した内容は青森県教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書に記載されたものである。市町村教育委員会から発行された報告書にも大きな成果がみられるが、時間及び紙面の都合から割愛させていただいた。

記載内容については、筆者が単独で抽出を行い確認作業を二度行ったが、見落としの可能性もあることをお断りしておく。

○集番号： 報告書の刊行順に付されたシリーズ番号(第○集)を使用し、この通し番号順に記載している。欠番となっているものは記載がみられなかったものである。

○遺跡名： 遺跡地名のみを記載した。また末尾のローマ数字は複数冊刊行の報告書のタイトルに付されたものである。(××遺跡Ⅲ等)

また、複数の遺跡による合本については、項目に合致するように、その遺跡名も付した。所載遺跡全体に及ぶもの(地質など)には付していない。

○種類： 分析・鑑定・同定などの種類を記した。また、依頼頻度の高いものはその名称(石質鑑定など)を記している。

○内容： 分析内容または対象遺物などを記した。本来であれば、分析方法をも記載すべきであるが、表の制限もあり、一部を除いて割愛した。

○分析名： 報告書記載の論文名及びタイトル名を記した。目次と本文中の記載が異なっているものについては、本文の名称を記した。また、章または節にタイトル名が付されているものについては、妥当と思われる方の名称を採用した。

○分析者： 分析者の氏名と依頼または報告時の所属及び職名を記した。複数名での報告についてはなるべく記載するようにしたが、特に大勢の場合については代表者名だけを記載したものもある。

氏名の記載には失礼のないように万全を期したつもりであるが、誤りがある場合はお許しいただきたい。

○備考： 分析試料点数・特記事項等について記載した。また、現在入手が困難な昭和50年代の報告書についてはなるべく成果を記すこととした。

自然科学分野の研究法について学習できる文献を下記に紹介する。

『考古学のための化学10章』馬淵久夫、富永 健 編 東京大学出版会 (1981)

『続 考古学のための化学10章』馬淵久夫、富永 健 編 東京大学出版会 (1986)

『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 クバプロ (1989)

『改訂版 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』田中 琢、佐原 眞 編 クバプロ (1995)

『考古学と物理化学』東村武信著 学生社 (1980)

『年代測定概論』兼岡一郎著 東京大学出版会 (1998)

自然科学的分析一覽 青森県教育委員会報告書から

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
13	今別・原子バイパス関係 (今別バイパス) 中宇田 (今別バイパス) 亀ヶ岡	地形 自然環境 地質 石質鑑定 自然環境 石質鑑定 自然環境 石質鑑定 同定 同定 分析	地形・地質 地質 地質・地質	地形の概要 地質概況および石器等の石質について 中宇田遺跡と地層厚 地質概況および石器等の石質について 植物性遺物について 花粉分析について	佐藤敬 県教育センター指導主事 佐藤敬 県教育センター指導主事 佐藤敬 県教育センター指導主事 堀原鉄郎 弘前大学教育学部講師 池田敬 県教育事務所指導主事 池田敬 県教育事務所指導主事 赤坂正一 県林業試験場森林科長 新戸部隆 県立三沢高校教諭 新戸部隆 県立三沢高校教諭 川村真一 県立金木高校教諭 池田敬 県教育事務所指導主事 木越邦彦 学習院大学教授 金子浩昌 早稲田大学講師 森本岩太郎 聖マリアンノ医科大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 宮城一男 弘前大学助教授 松山力 県立八戸高校教諭 永井敏彦 県教育センター指導主事 池田敬 県教育事務所指導主事 渡辺誠 平安博物館助教授 西田正規 近畿大学助手	1点 1号住居面の炭化層 BP210 ± 70 AD1740 火葬骨 壮年期男性1体分 1点 炭化材 BP450 ± 70 AD1500 赤坂氏の同定結果を出土層位との関係で記載
20	大沢内溜池遺跡	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の自然環境	川村真一 県立金木高校教諭	
21	雷山遺跡・永泉寺跡 雷山 永泉寺	石質鑑定 年代測定 同定 同定 年代測定 石質鑑定	14 C β線計数法 人骨 人骨 14 C β線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 出土人骨について 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	木越邦彦 学習院大学教授 金子浩昌 早稲田大学講師 森本岩太郎 聖マリアンノ医科大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 宮城一男 弘前大学助教授 松山力 県立八戸高校教諭 永井敏彦 県教育センター指導主事 池田敬 県教育事務所指導主事 渡辺誠 平安博物館助教授 西田正規 近畿大学助手	1点 1号住居面の炭化層 BP210 ± 70 AD1740 火葬骨 壮年期男性1体分 1点 炭化材 BP450 ± 70 AD1500
22	近野遺跡	石質鑑定	炭化材・植物遺存体	竪穴内出土炭化木材の材質鑑定	松山力 県立八戸高校教諭 永井敏彦 県教育センター指導主事 池田敬 県教育事務所指導主事 渡辺誠 平安博物館助教授 西田正規 近畿大学助手	10点 平安時代住居壁材 クリ材 5点(他) 写真最終ページに記載
24	むつ小川原関係 弥生(2) 弥生(3) 雷ノ沢(1) 雷ノ沢(2)	年代測定 年代測定 年代測定 年代測定 年代測定 同定 年代測定	14 C β線計数法 14 C β線計数法 14 C β線計数法 14 C β線計数法 炭化材 14 C β線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 青森県浅瀬石遺跡等の炭化材分析について 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 西田正規 近畿大学助手 木越邦彦 学習院大学教授 山口義伸 県立田名部高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 池田敬 県教育事務所指導主事 岩本義雄 脇野沢村立小沢中学校教諭	1972年出土分 まえがき(本文2p目)に記載あり 1点 1号住居炭化材 BP1070 ± 75 AD880 1点 1号住カマド炭化物 BP1160 ± 80 AD790 1点 1号住居炭化物 BP3470 ± 175 BC1520 25点、杜丹平南分7点、浅瀬石分18点 住居跡出土炭化材 7点 1830 ± 90、2660 ± 95、1580 ± 90、1600 ± 80、1890 ± 80、2030 ± 90、1760 ± 90
27	千歳(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の火山灰層序について	木越邦彦 学習院大学教授 山口義伸 県立田名部高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 池田敬 県教育事務所指導主事	調査員の岩本氏が機器を借りて、自前で探査を行った 1973年出土分 付記(59p目)に記載あり、下記2遺跡 1点 1号フラスコ状ピット BP4620 ± 120 BC2670 1点 3号住居 BP4200 ± 80 BC2250
28	むつ小川原関係 新納屋(1)	石質鑑定 遺構確認 年代測定 年代測定 年代測定	電気探査 14 C β線計数法 14 C β線計数法 14 C β線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 自然環境	木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 西田正規 近畿大学助手 木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	1点 2号住居跡炭化材 クルミ 1点 2号住居跡炭化材 BP1430 ± 75 AD550
29	五戸町中ノ沢西張・古街道長根 中ノ沢西張	自然環境 同定 同定 年代測定 同定 年代測定 同定 年代測定 同定 年代測定	地形・地質・層序 炭化材 14 C β線計数法 遺跡内層序 遺跡内層序 遺跡内層序 自然環境 自然環境	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 層序 層序 層序 遺跡周辺の地理的環境	木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 西田正規 近畿大学助手 木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	
30	白山堂・妻の神 妻の神	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序 14 C β線計数法 人骨	遺跡周辺の自然環境 自然遺物について 検出された人骨について	木越邦彦 学習院大学教授 金子浩昌 早稲田大学講師 森本岩太郎 聖マリアンノ医科大学教授 奈良岡浩一 県立藤崎岡去高校実習講師 甲田光明 県立浪岡高校教諭 沢田庄一郎 県立青森西高校教諭 池田敬 県教育事務所指導主事	例言中に依頼した旨、表記しているが、結果報告の記載なし 32点 鑑定書として記載 4グループ 墓坑出土含む
31	泉山	自然環境 年代測定 同定 同定 年代測定 同定 年代測定	地形・地質・層序 14 C β線計数法 人骨	遺跡周辺の自然環境 自然遺物について 検出された人骨について	木越邦彦 学習院大学教授 金子浩昌 早稲田大学講師 森本岩太郎 聖マリアンノ医科大学教授 奈良岡浩一 県立藤崎岡去高校実習講師 甲田光明 県立浪岡高校教諭 沢田庄一郎 県立青森西高校教諭 池田敬 県教育事務所指導主事	
32	鳥海山	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地理的環境 近野遺跡の地形的環境 近野遺跡で出土した石器とその石材について	池田敬 県教育事務所指導主事	
33	近野遺跡(II)	石質鑑定	地形・地質	近野遺跡で出土した石器とその石材について	池田敬 県教育事務所指導主事	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		自然環境 年代測定	地質 熱残留磁気 14 C β線計数法	近野遺跡内堆積土層の分析と対比 近野遺跡かまど焼土の熱残留磁気測定 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	新渡戸隆 木越邦彦 山口義伸 松山力 金子浩昌 川村真一 奈良岡洋一 池田敬 佐藤巧 松山力 嶋倉日三郎 奈良岡洋一 金子浩昌 木越邦彦 佐藤巧	陸下火山灰について記載 2種あり、一つは十和田a、他は不明 11～12世紀と推定 県内初の試み 第2次調査分5点 トングリ BP3490 ± 95 1540BC、トチ BP3330 ± 100 1380BC、BP1450 ± 90 AD5000、BP1500 ± 70 AD450、BP1640 ± 80 AD310 池田敬氏、奈良正義氏からの助言・指導
34	水木沢	自然環境 石質鑑定 同定	地形・地質 地質 植物遺体 獣骨	地形、地質概要 石器等の石質	学習院大学教授 県立八戸高等学校教諭 早稲田大学講師 県立金木高等学校教諭 県立八戸高等学校教諭 早稲田大学講師 川村真一 県立藤岡園芸高等学校実習講師 山口義伸 県立田名部高等学校教諭 池田敬 県東青教育事務所指導主事	
35	石上神社	同定	植物遺体	遺跡周辺の地理的環境 植物性炭化物	佐藤巧 県立郷土館研究員 松山力 県立八戸高等学校教諭 佐藤巧 県立郷土館研究員	
36	むつ小川原関係 概報	自然環境 石質鑑定	地質	地形・地質の概要	池田敬 県立郷土館研究員	
37	青森市内	自然環境 石質鑑定	層序・火山灰	層序	佐藤巧 県立郷土館研究員	
38	熊沢	自然環境 石質鑑定	炭化材	昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について	甲田光明 県立浪岡高等学校教諭 佐藤巧 県立郷土館研究員	79点 クリ23、スキ22、アスナロ14他 平安時代住居出土 炭化米 平安時代 44号住居出土 「鹿角製品」・馬骨 1点 2号住居跡炭化材 BP1430 ± 75 BC310
39	渡常平	自然環境 石質鑑定	炭化材	昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について	甲田光明 県立浪岡高等学校教諭 佐藤巧 県立郷土館研究員	13点 付記として記載。ほとんどがクリ
40	高館	自然環境 年代測定 植物同定 同定 鑑定	炭化材 14 C β線計数法 炭化材 種子 鉄製品、鉄滓	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について	木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 奈良岡洋一 県立藤岡園芸高等学校実習講師 新沼鉄夫 日本金属学会付属金属博物館参与 多田正 新日鐵釜石製鉄所	依頼した旨の表記はあるが、記載なし 95点 附欄に収録 31点 平安時代住居出土 米・豆類 遺物実見後の所見として記載
41	三内浜部	自然環境 植物同定 年代測定	地形・地質・層序 炭化材 14 C β線計数法	地形・地質の概要と遺跡の層序 昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	池田敬 県東青教育事務所指導主事 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授	16点 クリ、ケヤキ 3点 採み込み1枚に記載。BP4320 ± 220 BC2370、 BP4410 ± 180 BC2460、BP3970 ± 120 BC2020
42	むつ小川原関係 概報	石質鑑定			木越邦彦 学習院大学教授	
43	下北原築園係 分布	石質鑑定			池田敬 県東青教育事務所指導主事	
44	羽黒平	分析 鑑定	火山灰 鉄滓	遺構内堆積土中の火山灰について	沼田庄一郎 県教育センター指導主事 新沼鉄夫 日本金属学会付属金属博物館参与	
45	杉の沢	自然環境 石質鑑定	地質 炭化種子・炭化材 地質	遺跡周辺の地学的環境について	甲田光明 県立青森西高等学校教諭 松山力 県立八戸高等学校教諭 新沼鉄夫 日本金属学会付属金属博物館参与 奈良岡洋一 県立藤岡園芸高等学校実習講師	遺物実見後の所見として記載
46	松元	自然環境 石質鑑定	炭化種子・炭化材 地質	自然環境	新沼鉄夫 県立三沢高等学校教諭 池田敬 県東青教育事務所指導主事	5点 新日鐵釜石製鉄所で分析
47	近野	自然環境 石質鑑定 年代測定 植物同定 分析	地形・地質 14 C β線計数法 炭化材 花粉	近野遺跡の地理的環境 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種 花粉分析からみた遺跡周辺の自然環境について	沼田庄一郎 県教育センター指導主事 池田敬 県東青教育事務所指導主事 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 新沼鉄夫 県立三沢高等学校教諭	2点 BP3670 ± 120 BC1720、BP3160 ± 190 BC1210 107点 縄文中期住居部材等 ほとんどがクリ材 縄文時代の植生
48	むつ小川原関係試掘概報	石質鑑定			池田敬 県東青教育事務所指導主事	
49	細越	石質鑑定			池田敬 県東青教育事務所指導主事	
50	むつ小川原関係事前調査	石質鑑定			池田敬 県東青教育事務所指導主事	
51	桧柳野工業団地試掘調査	自然環境 石質鑑定	地質	遺跡周辺の地学的環境について	甲田光明 県立青森西高等学校教諭 佐藤巧 県立郷土館研究員	
52	大平	同定	炭化米	炭化米について	佐藤敬也 元元農林省産産試験場総務課長	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		樹種同定 分析	炭化材 火山灰 地形・地質	木製品及び炭化材の樹種について 歴史時代型穴住居跡出土火山灰について 遺跡周辺の地学的環境について	嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 沢田庄一郎 県教育センター指導主事 甲田光明 県立青森西高校教諭 佐藤巧 県立郷土館学芸員	19点 スギ7、ケヤキ7、ホノノキ1、ススキ3他 県内各遺跡の火山灰の比較
53	砂沢平	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地学的環境について	甲田光明 県立青森西高校教諭	
54	古館	自然環境 石質鑑定	炭化材 炭化種子他 炭化種子類について	出土炭化木の樹種同定 炭化物穀物と種子の同定 炭化種子類について	甲田光明 県立青森西高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 奈良岡洋一 県立藤崎園芸高校実習講師 松川昭平 大阪市立大学教授	320点 スギ133、クリ24、アスナロ22、ヤナギ*16、ケヤキ11他 ほとんどがコメ
55	大面	自然環境 石質鑑定 産地同定 分析	地形・地質 石器素材 火山灰	大面遺跡周辺の自然的環境 石器の原石を採る 大面遺跡の火山灰について	池田敬 県東青森事務所指導主事 池田敬 県東青森事務所指導主事 池田敬 県東青森事務所指導主事 沢田庄一郎 県教育センター指導主事	
56	永野	自然環境 年代測定 樹種同定	気象・地質・層序 14 C β 線計数法 炭化材	自然環境 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 永野遺跡の炭化材の樹種について	甲田光明 県立青森西高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	1点 縄立2号住 BP3690 ± 130 1740BC 40点 焼失家屋内の炭化材、スギ・クリが多い
57	長七谷地貝塚	自然環境 指導 年代測定 同定 年代測定 同定 同定 同定	貝殻他の選別 軟体動物(貝) 脊椎動物 骨角製品 骨角製品	長七谷地貝塚周辺の自然環境 遺跡の地形と層序 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 自然遺物 自然遺物	松山力 県立八戸高校教諭 石山尚 通産省工業技術院地質調査所技官 木越邦彦 学習院大学教授 小滝一三 農林水産省東北水産研究所技官 金子浩昌 早稲田大学講師 金子浩昌 早稲田大学講師 金子浩昌 早稲田大学講師	1次3点 2点一貝 6570 ± 280、7180 ± 150、1点測定不可 2次1点 160 ± 200 貝塚出土
58	神明町	自然環境 石質鑑定	炭化材 地形・地質	八戸市長七谷地貝塚遺跡から出土した炭化材の樹種 自然環境	嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 川村真一 県立金木高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	1次4点、2次炭化小破片の顕微鏡観察
59	柗留(2)	自然環境 樹種同定 石質鑑定	地形 炭化材	柗留(2)遺跡の地形的環境 柗留(2)遺跡から出土した炭化材の樹種	沢田庄一郎 県教育センター指導主事 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 松山力 県立八戸高校教諭	115点 附編として袋詰め添付
60	五輪堂	同定	人骨	環境と層序	森本岩太郎 聖マリアーナ医科大学教授	
61	妻館	自然環境 石質鑑定	気象・地質・層序	環境と層序	山口義伸 県立田名部高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	
62	新納屋	自然環境 石質鑑定 同定	気象・地質・層序 種子	環境と層序について	山口義伸 県立田名部高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 渡辺誠 名古屋大学助教授	4片は吹切式式期に伴うオニグルミ
63	鷹架	自然環境 石質鑑定 分析	気象・地質・層序 リン、ハドモリフチン出法	環境と層序	山口義伸 県立田名部高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 鹿内武次 県農業試験場化学部土壌科講師	
64	八戸平原関係I	自然環境 石質鑑定	地形・地質	周辺の地形と地質	松山力 県立八戸高校教諭	47点 土坑内及び壁内土壌
65	八戸平原関係II	自然環境 石質鑑定 年代測定 樹種同定	地形・地質 14 C β 線計数法 炭化材	周辺の地形・地質 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 田ノ上遺跡出土炭化材の樹種 志民(2)遺跡の人骨について	松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 森本岩太郎 聖マリアーナ医科大学教授	1点 BP3730 ± 130 1780BC 6点 付編として記載
66	明前	自然環境 樹種同定	気象・地質・層序 炭化材	遺跡の立地 明前遺跡から出土した炭化材の樹種 自然環境	山口義伸 県立田名部高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 松山力 県立八戸高校教諭	2点 クリ7、ホノノキ
67	発栄沢	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定	気象・地質・層序 炭化材 花粉 14 C β 線計数法	発栄沢遺跡出土の炭化材の樹種 花粉分析	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 パリン・サウヴェイ(株) 木越邦彦 学習院大学教授	18点 クリが多い、ホノノキ、アスナロ、イチイ他 161号溝状ピットの土壌 3点 10140 ± 300、1910 ± 110、32290(地山土壌)

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
78	陣馬川原 榎ノ木 垂柳 概観	分析 自然環境 分析 分析 分析 分析	火山灰 火山灰・土層 土層 プラントオパール 土層・火山灰 火山灰	陣馬川原遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 火山灰と土層の蛍光X線分析 垂柳遺跡の層序と土層特徴 遺跡の土層について プラントオパール分析による水田跡の調査 垂柳遺跡で採集した土層・火山灰の蛍光X線分析 垂柳遺跡における火山灰層	三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 水野裕 弘前大学助教授 松山力 県立八戸高校教諭 松井健 陸地域開発コンサルタンツ取締役 藤原宏志 宮崎大学助教授 三辻利一 奈良教育大学教授 町田洋 東京都立大学教授	2点 十和田 a 火山灰 2点 断定し得ない
79	一ノ渡	自然環境 石質鑑定 産地同定	地形・地質・層序	遺跡周辺の自然環境 一ノ渡遺跡から出土したひすい大珠のX線粉末回折法による分析と所見 学習院大学放射線炭素年代測定結果報告書 一ノ渡遺跡から出土した炭化材の樹種	松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 大貫仁 弘前大学理学部教授 青木正博 弘前大学助手 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	新潟県 青梅一小滝地域産 4点 1点測定不可 5510 ± 220, 3760 ± 120, 6030 ± 140 5点 クルミ2、クリ1、カヤ1、サクラ類1
80	浜通	自然環境 石質鑑定 年代測定 樹種同定	炭化材 地形・地質・層序 14 C β線計数法	遺跡の地形的環境 学習院大学放射線炭素年代測定結果報告書 青森県浜通遺跡出土人骨について 志野陶片付着黒色物質の化学成分の調査 浜通他遺跡出土の炭滓関係資料について	松山力 県立八戸高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学教授 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 木村克彦 八戸工業高校教授 井上徳四郎 川口重紀 県国有林材生産協同組合	1点 骨から採取のコラーゲン BP560 ± 80 AD1390 青銅製品の再加工が精直し工程で使用されたか？ 木製品など
81	弥栄平(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	松山力 県立八戸高校教諭	
82	和野前山	自然環境 石質鑑定 樹種同定 分析 樹種同定 分析 樹種同定	地形・地質・層序 炭化材 鉄滓 石質	地形と地質 和野前山遺跡から出土した炭化材の樹種	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 前田哲 県繊維金属試験所技師 宮城一男 弘前大学助教授	10点 分析結果のみ記載 数点の石器 蛇紋岩中に硬質の脈 硬玉の可能性ありとの表示
83	星巻沢	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形	松山力 県立八戸高校教諭	
84	垂窪	自然環境 石質鑑定 樹種同定 年代測定 分析	地形・地質・層序 炭化材 14 C β線計数法 火山灰・粘土	遺跡の立地と周辺の地質・遺跡の基本層序 重窪遺跡から出土した炭化材の樹種 学習院大学放射線炭素年代測定結果報告書 重窪遺跡出土火山灰及び粘土の蛍光X線分析	松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授	50点 クリ、コナラ、ヤチダモ他 炭素はほとんどがコナラ 2点 BP6200 ± 390, 4250BC, BP4290 ± 130 2340BC
85	白山平	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質について	松山力 県立八戸高校教諭	
86	牛ヶ沢(3)	自然環境 石質鑑定 樹種同定 分析	地形・地質・層序 炭化材 花粉	自然的環境 牛ヶ沢(3)遺跡の炭化木 牛ヶ沢(3)遺跡遺構内出土の花粉	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	3点 カエデ類、ススキ、クリ 試料処理一安部聡一弘前大学環境研究室、棟鏡一西野緑一岩手県立博物館、指導一新戸部隆 4 試料 はとんどがオニグルミ、クリ1
87	朝日山	石質鑑定 分析	火山灰 屈折率	青森市朝日山遺跡における火山灰層	松山力 県立八戸高校教諭 窪辺誠 名古屋大学教授	十和田 a 火山灰を母材とする
88	垂柳	自然環境 分析 分析 分析 同定 樹種同定 分析	層序 足跡 炭化米 炭化木 花粉	地理的環境 遺跡の層序と土層の特徴 足跡 垂柳遺跡における水田跡の研究 遺跡土層について 垂柳遺跡から出土した米について 垂柳遺跡から出土した木質物の樹種 垂柳遺跡の花粉分析的研究	水野裕 弘前大学助教授 松山力 県立八戸高校教諭 平沢潤一郎 放送大学教授 藤原宏志 宮崎大学助教授 松井健 陸地域開発コンサルタンツ取締役 須岡寛 県農業試験場稲作部長 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 中村純 前高知大学教授	プラントオパールなど分析・調査法について記述 12点 ケヤキ5点、カエデ類2点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
89	尻高(2)・(3)・(4)	分析 分析 分析 年代測定 年代測定 自然環境 石質鑑定	種子 火山灰・土壌 土器胎土 火山灰 屈折率 堆積残留磁気 年代測定 14 C β線計数法 地形・地質・層序	青森県垂柳遺跡水田跡埋蔵種子分析 垂柳遺跡出土火山灰質堆積物・土壌の蛍光X線分析 垂柳遺跡出土土器の胎土分析 垂柳遺跡における火山灰質堆積物 堆積残留磁気測定結果と年代の推定 学習院大学放射線炭素年代測定結果報告書 地形、気候及び地質	菅原安夫 三辻利一 前岡山大学教授 奈良教育大学教授 奈良教育大学教授 町田洋 東京都立大学教授 松山力 県立八戸高等学校 木越邦彦 学習院大学教授 沢田庄一郎 県教育センター指導主事 岡田緑 県教育センター指導主事 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	県下及び岩手・秋田の火山灰の比較も含む 29点 弥生土器 20点、須磨器 5点 屈折率測定一群馬大学教授新井隆夫 18点 測定一福島大学真鍋健一、東北大学中川久夫 新戸部隆分析協力 7点 8点 クリ、アスナロが多い 6点 2度に分けて依頼 7号住居の木には「朱」、他はベンガラ 膠質膜一漆 蛍光X線分析・赤外線分析
90	大石平	自然環境 樹種同定 分析 年代測定 分析 産地同定 石質鑑定	地形・地質・層序 炭化材 14 C β線計数法 赤色顔料・漆	大石平遺跡(1)周辺の地形・地質 大石平遺跡(1)出土の炭化材 大石平遺跡(1)出土赤色顔料並びに下地塗物質及び脂質成分 分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 大石平遺跡(1)出土火山灰の蛍光X線分析 石器に利用された安山岩の搬入源について 遺跡の環境	山口義伸 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 木越邦彦 学習院大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 佐藤巧 県立郷土館学芸員 山口義伸 県立木造高校稲垣分校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 佐藤巧 県立郷土館学芸員	28点 2・9号住出土他 ほとんどがクリ 赤色顔料一ベンガラ、膠質膜一漆 3点 8310 ± 120、3860 ± 320、3120 ± 190 4点 うち3点 白頭火山灰 泊安山岩 (肉眼的観察)
91	表館	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の環境	山口義伸 松山力 県立八戸高校教諭	
92	石ノ窪(1)・(2)	自然環境 石質鑑定 樹種同定 同定 分析	地形・地質 炭化材 種子 花粉	自然的環境 石ノ窪(2)遺跡出土炭化材の樹種 石ノ窪(2)遺跡出土の植物遺体 石ノ窪(2)遺跡の花粉分析	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 渡辺誠 名古屋大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 新戸部隆	6点 クリ、コナラ クリ、トチノキ 走査電子顕微鏡写真一弘前大学塩原鏡哉教授
93	売場・大タルミ	自然環境 年代測定 樹種同定 石質鑑定	地形・層序 14 C β線計数法 炭化材 地形・地質	自然的環境 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 八戸市古宮遺跡から出土した炭化材の樹種 地形と地質	松山力 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 松山力 県立八戸高校教諭	2点 八戸火山灰と高部火山灰の埋理面の炭化樹木 3点 八戸火山灰と高部火山灰の埋理面の炭化樹木
94	国道338号関係 幸畑(7)他	石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形・地質と気候	松山力 県立八戸高校教諭	
95	今津・間(1)次	自然環境 石質鑑定 分析 分析	地形・地質 火山灰 赤色顔料・胎土 地形・地質・層序	遺跡周辺の地形・地質と気候 今津バイパス関連遺跡の火山灰について 今津遺跡出土の高状三土器並びに関連土器の分析結果	沢田庄一郎 県教育センター指導主事 三辻利一 奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館	12点 蛍光X線分析及び走査型電子顕微鏡及び赤外分光分析法
96	発茶沢	自然環境 分析	地形・地質・層序 火山灰	遺跡の概観 発茶沢遺跡の火山灰の蛍光X線分析 遺跡の環境	山口義伸 松山力 県立木造高校稲垣分校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	1点
97	大石平II	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の環境	山口義伸 松山力 県立八戸高校教諭	
98	弥栄平(1)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の地形と層序	山口義伸 松山力 県立木造高校稲垣分校教諭	
99	独狐	自然環境 石質鑑定 同定	地形・地質 鹿骨・魚骨	遺跡の立地と自然環境	佐藤巧 松山力 県立八戸高校教諭 小林和彦 八戸市教育委員会学芸員	同定結果のみ記載
100	沖附(1)	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質 火山灰	自然的環境 沖附(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	山口義伸 松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	5点
101	沖附(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質	沖附(2)遺跡周辺の地形・地質	山口義伸 松山力 県立木造高校稲垣分校教諭	
102	境岡館	自然環境	地形・地質	遺跡付近の地形と地質	松山力 県立八戸高校教諭	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		同定 同定 同定 分析 分析 分析	獣骨 米・麦 植物遺体 炭化材 須臾器胎土 火山灰 鉄製品・鍍滓 脂肪酸他	李平下安原遺跡から出土した動物遺存体 李平下安原遺跡出土の炭化米及び炭化大麦について 李平下安原遺跡出土の植物遺体 李平下安原遺跡から出土した炭化材の樹種 李平下安原遺跡出土須臾器の胎土分析 李平下安原遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 李平下安原遺跡に関する一考察 李平下安原遺跡の土壌中の無機燐酸の含有量と残存 脂肪酸組成並びに土壌中の残存アミノ酸のラセミ化率	小林和彦 八戸市教育委員会学芸員 浪岡實 農業試験場稲作部長 渡辺誠 名古屋大学助教授 嶋倉巳三郎 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 木村克彦 八戸工業大学教授	81点 88点 15点
112	上尾歌(1)A	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡の地形と層序	小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 山口義伸 県埋蔵文化財調査センター	
113	上尾歌(1)C	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 佐藤巧 県立郷土館学芸員 小林和彦 八戸市教育委員会学芸員 藤科哲男・東村武信 京都大学原子炉実験所 三辻利一 奈良教育大学教授	95点 糸魚川産と推測 火山灰3点、須臾器3点
114	上尾歌(2)I	分析	成分・素材 地形・地質・層序	上尾歌(1)遺跡出土赤色糸状物質および姉の自然科学的調査 遺跡周辺の地形・遺跡層序	山口義伸 八戸工業高等専門学校教授 赤沼英男 岩手県立博物館 松山力 県立八戸高校教諭	5点 10点 縄文中期8号住 9点クワリ材 2点
115	上尾歌(2)II	自然環境 石質鑑定 同定 分析 同定 産地同定 分析 分析 同定 産地同定 分析	炭化材 14.C β線計数法 地形・地質・層序 人骨 土壌・赤色顔料・脂肪酸 貝類 ヒスイ 土器胎土 火山灰 炭化材 鉄器	上尾歌(1)遺跡出土ヒスイ製玉類の産地分析 上尾歌(1)遺跡出土火山灰と須臾器の蛍光X線分析 上尾歌(1)遺跡の土壌土壌中の赤色顔料並びに無機燐酸の含有 料と残存脂肪酸組成及び壺形土器と土器片の赤色顔料の 分析 上尾歌(1)遺跡出土赤色糸状物質および姉の自然科学的調査 遺跡周辺の地形・遺跡層序 炭化材の樹種同定(第9号住居跡について) 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 自然環境 六ヶ所村上尾歌(2)遺跡出土人骨について 六ヶ所村上尾歌(2)遺跡の各土壌土壌の無機燐酸及び残存脂肪 酸組成並びに赤色顔料の分析 上尾歌(2)遺跡出土小貝塚の貝同定について 上尾歌(2)遺跡を中心とした青森県出土のヒスイ製大珠・玉類 の産地分析 上尾歌(2)遺跡出土土器の胎土分析 上尾歌(2)遺跡に堆積する火山灰の蛍光X線分析 上尾歌(2)遺跡出土の炭化材の樹種 上尾歌(2)遺跡出土鉄器の金属学的解析について 遺跡周辺の地形及び地質・遺跡の基本層序	松山力 県立八戸高校教諭 森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学教授 山口義伸 八戸工業高等専門学校教授 小滝一三 農林水産省東北水産研究所技官 小滝一三 八戸工業高等専門学校教授 藤科哲男・東村武信 京都大学原子炉実験所 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 松山力 県立八戸高校教諭	土壌出土の焼人骨 成人1体分 改葬による 土壌は壘で、135土壌は改葬壘、128土壌は周囲で動物の解体などが 行われた 赤色顔料はベンガラ ほとんどがイソソジミ 蛍光X線分析による 計11点 31点 7点 42点
116	発茶沢(1)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質	松山力 県立八戸高校教諭 浪岡實 農業試験場稲作部長 渡辺誠 名古屋大学助教授 嶋倉巳三郎 奈良教育大学教授 沢田庄一郎 県教育センター指導主事	5点 3点
117	二ツ石	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の自然環境	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター	
118	富ノ沢(1)・(2)	自然環境 石質鑑定 同定 同定 同定 分析	炭化材 炭化種子 炭化材 土壌(リン・脂肪酸)	遺跡周辺の地形及び層序 富ノ沢(2)遺跡A出土炭化材の樹種 放射性炭素年代測定結果報告書 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡A地区第1号穴住居跡及び埋設土 器周囲の土壌中の無機燐酸の含有量と残存脂肪質の脂肪酸 組成及び周辺の地形と地質	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 奈良教育大学教授 村中健 八戸工業大学助教授	15点 1・2号住出土 すべてクワリ材 2点 内1点は測定不可
119	鮎野	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 土壌(リン・脂肪酸) 赤色顔料	遺跡及び周辺の地形と地質 福地村鮎野遺跡第4号土壌土壌の無機燐酸の含有量と残存 脂肪質の脂肪酸組成および第16号土壌出土人骨の焼成温度と 第41号土壌土壌中の赤色顔料の化学分析	小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 松山力 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授	縄文中期 埋設土器には人体の埋葬の可能性 4号土壌(ケツ林耳飾出土)周囲の燐酸・脂質が多く墓壘と断定できない 16号土壌 火葬壘か火葬施設 赤色顔料 純度の低い赤鉄鉱の自然ベンガラ

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
120	表鏡(1)Ⅲ・発茶沢(1)Ⅳ 表鏡	自然環境 石質鑑定 同定 産地同定 分析 樹種同定 年代測定 自然環境 石質鑑定 分析 同定 樹種同定 分析 年代測定	地形・地質・層序 火山灰 貝 黒曜石 花粉 炭化材 14 C β線計教法 層序 火山灰 須恵器胎土 火山灰 炭化米 炭化材 鉄器 14 C β線計教法	遺跡の地理的環境と層序 千良浮石について 貝の分類 上北郡六ヶ所村表鏡(1)遺跡を中心とした青森県内主要遺跡出土の石材産地分析 表鏡(1)遺跡の花粉分析 表鏡(1)遺跡第108号住居跡出土炭化物の樹種 木炭及び貝殻による14 C年代測定について 発茶沢(1)遺跡の層序 歴史時代の降下火山灰について 発茶沢(1)遺跡出土須恵器の胎土分析 発茶沢(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 発茶沢(1)遺跡B地区出土の炭化米について 発茶沢(1)遺跡出土炭化材の樹種 発茶沢(1)遺跡出土鉄器の金属学的解析 放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 小滝一三 農林水産省東北水産研究所技官 齋科哲男・東村武信 京都大学分子生物学研究所 パリン・サージェイ (株) 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 村中健 八戸工業大学助教授 山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 浪岡寛 県水田対策課課長補佐 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 村中健 八戸工業大学助教授	アサリ、オオノガイ、ハマグリ他 蛍光X線分析後のクラスター分析 県内17遺跡、114点 小破片が多く同定困難 貝1点 BP6380 ± 130 54点 22点五所川原産 22点新潟県小泊産 12点 26点 含リン磁鉄鉱(始発原料) 十砂鉄(脱炭剤)の精錬工程 2点
121	表鏡(1) 試掘	石質鑑定 分析	火山灰	表鏡(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 三辻利一 奈良教育大学教授	2点
122	鶴ヶ鼻	自然環境 分析	地形・地質 14 C β線計教法 人骨	遺跡周辺の地形及び地質について 放射性炭素年代測定結果報告書 鶴ヶ鼻遺跡出土人骨について	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 村中健 八戸工業大学助教授 森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学教授	4点
124	下沢	自然環境 分析	地形・地質・層序	遺跡周辺の自然環境	遠藤正夫 県埋蔵文化財調査センター	沢田庄一郎「小田内沼」報文を承諾を得て遠藤が抜粋加筆
125	幸畑(7)	自然環境 石質鑑定 樹種同定 分析 分析 年代測定 分析	地形・地質・層序 炭化材 土壌(脂肪酸) 土層構成鉱物 14 C β線計教法 花粉・プラントオパール	遺跡周辺の地形・地質 幸畑(7)遺跡から出土した炭化材の樹種 幸畑(7)遺跡の第1号竈穴住居跡出土石棒と石皿及び第8号と第9号土壌土壌等の残存脂質の脂肪酸組成 第II層の構成鉱物について 放射性炭素年代測定結果 幸畑(7)遺跡花粉分析・プラントオパール分析報告	松山力 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 小山陽造 八戸工業高等専門学校技官 菊池良栄 八戸工業高等専門学校文部技官 松山力 県立八戸高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 パリン・サージェイ (株) 工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	13点 石棒 脂肪分の多い動物の供献 石皿 動物の調理 8号土壌 埋葬施設、9号土壌 動物遺体の投棄 2点 花粉 試料不良
126	表鏡(1)Ⅳ・発茶沢(1)Ⅴ	自然環境 石質鑑定 分析 分析	地形・地質・層序 須恵器胎土 鉄器	遺跡の地形と層序 発茶沢遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 発茶沢遺跡出土鉄器の金属学的解析	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 松山力 県立八戸高校教諭 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	9点 2点 1点は含リン磁鉄鉱十砂鉄炭 1点は含銅磁鉄鉱? 素材は大陸からのものか?
127	表鏡(1)Ⅴ	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定	地形・地質・層序 花粉 14 C β線計教法	遺跡の地形と層序 花粉分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 県立八戸高校教諭 パリン・サージェイ (株) 木越邦彦 学習院大学教授	試料不良 2点
128	赤次郎遺	自然環境 石質鑑定 年代測定 樹種同定 分析	地形・地質・層序 14 C β線計教法 炭化材 火山灰	遺跡及び周辺の地形と地質 放射性炭素年代測定結果報告書 赤次郎遺跡から出土した炭化材の樹種 赤次郎遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	松山力 県立八戸高校教諭 村中健 八戸工業大学助教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授	2点 14点 3点 奈良時代住居出土の炭化物はコナラ
129	中崎館	自然環境 石質鑑定 樹種同定 同定 分析 年代測定	地形・地質・層序 陶器胎土 炭化材 炭化米 鉄器 14 C β線計教法	遺跡周辺の地形と地質 中崎館遺跡出土陶器の蛍光X線分析 中崎館遺跡から出土した炭化材の樹種 中崎館遺跡出土の炭化米について 中崎館遺跡出土鉄器の金属学的解析 放射性炭素年代測定結果について	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター 松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 浪岡寛 県水田対策課課長補佐 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 (財)県工業技術教育振興会	52点 14点 2点 ほとんどが珠洲系
130	奈沢	自然環境 分析	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形・地質と層序	山口義伸 県埋蔵文化財調査センター	2点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
132	雷ノ沢(1)・(2) II	石質鑑定	熱残留磁気	李沢遺跡の焼土熱残留磁気測定結果	山口義伸 県立蔵文化財調査センター	平安時代カマド・製鉄炉 AD1000～1200年頃 2点 内1点不良 4点 3点 100点 半数は五所川所産、30点は新潟県小泊産 50点 77点 3点を除き出来島産と判定 33点 外部からの鉄素材の供給→砂鉄を原料とした一貫操業への移行と推察
133	雷ノ沢(1)・(2) III	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の地形と地質	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭	
134	中野平 縄文時代編	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の地形・地質・層序	山口義伸 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	
	古代編	同定 年代測定 分析 分析 同定	炭化種子 14 C β線計数法 土器胎土 火山灰・胎土 種子	縄文時代早期中草の炭化堅果類 第112号竪穴住居跡出土クルミの年代測定 中野平遺跡出土四耳堂の胎土について 中野平遺跡出土火山灰・須恵器・土師器の蛍光X線分析 中野平遺跡から検出された微細植物遺体について	山口義伸 県立八戸高校教諭 渡辺誠 名古屋大学教員 中村俊夫 名古屋大学アインストープ総合センター 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 榎坂奈代 北海道大学理蔵文化財調査室 吉崎昌一 北海道大学助教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 星和夫 県立田原高等学校教諭 村中健 八戸工業大学助教授 赤沼英男 岩手県立博物館学芸調査員	112号住居面 オニグルミ BP8800 ± 180 6840BC 四耳堂-石川所産 長頸壺一産地不明 火山灰 54点 須恵器 33点 土師器 13点 38点 奈良住居2軒、平安住居5軒 48点 考古年代と開きがある結果 6点 22号竪穴-動物性食肉の調理 101号住居-自然堆積 炭化材の焼成温度-300℃程度 焼土の焼成温度-1000℃ 1点 白頭山古小牧火山灰 1点 十和田a 降下火山灰
135	鬼沢録沢・尾上山(2)・(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形	山口義伸 県立八戸高校教諭 松山力 県立八戸高校教諭	
	向山(4)	分析	火山灰 火山ガラス	中野平遺跡出土火山灰中の火山ガラスの形態について	小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 シヨウ元柱 弘前大学教育学部研究生 藤原純郎 弘前大学教育学部教授 山口義伸 県立八戸高校教諭	
		分析 同定 年代測定	火山灰・須恵器胎土 炭化材 鉄器 炭化種子 14 C β線計数法	出土火山灰・須恵器の蛍光X線分析 出土炭化木の樹種同定 出土鉄器の金属学的解析 炭化植物遺体の同定 放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館学芸調査員 榎坂奈代 北海道大学理蔵文化財調査室 村中健 八戸工業大学助教授	火山灰 6点 須恵器 1点 (小泊産 新潟) 176点 141点がナラ類 材料一砂鉄 4破片 2点
136	雷ノ沢録沢・尾上山(2)・(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の地形と地質	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭	
	西山	同定	黒曜石	弘前市鬼沢録沢・尾上山(2)・(3)遺跡出土の黒曜石製遺物の 原産地分析	山口義伸 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭	
	西山	分析 同定	地形・地質・層序	遺跡及び周辺の地形と地質	山口義伸 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭	
		分析 同定	14 C β線計数法 火山灰 種子	放射性炭素年代測定結果について 西山遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 西山遺跡から検出された微細植物遺体について	村中健 八戸工業大学助教授 三辻利一 奈良教育大学教授 榎坂奈代 北海道大学理蔵文化財調査室 松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立八戸高校教諭	1点 1号住 (縄文晩期) BP1980 ± 60 2点
137	雷ノ沢(2)IV	石質鑑定	貝類	西山遺跡から検出された微細植物遺体について	山口義伸 県立八戸高校教諭 佐藤巧 県立郷土館主任学芸員	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
138	弥生(6)・(7)・(8)	石質鑑定			松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭	
141	堀切沢(2)~(5) 堀切沢(3)	自然環境 石質鑑定 分析 樹種同定 年代測定 同定	地形・地質・層序 火山灰 炭化材 14 C β線計数法 種子	遺跡周辺の地形及び地質 出土火山灰の蛍光X線分析 出土炭化材の樹種同定 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 青森県堀切沢(3)遺跡出土の奈良時代の植物種子	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 吉崎昌一 北海道大学助教授 榎坂泰代 北海道大学理蔵文化財調査室	3点 5点 2点 炭培種の粟・黍が検出されるが米が未確認 畑作卓越タイプの生活か?
142	鳴沢・鶴崎(9)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形・地質及び遺跡内の基本層序	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 薬科哲男 京都大学原子炉実験所 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 千葉馨一 八戸工業高等専門学校技官	2点 15点 内、12点出来島産と判定 戸門・鶴ヶ坂もあり 土器は人骨遺体の改葬と推定
143	富ノ沢(2V)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形・遺跡周辺の基本層序	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭	
144	沢船込	自然環境 石質鑑定 分析 樹種同定 同定	地形・地質・層序 火山灰 炭化材 貝類	遺跡周辺の地形と地質 沢船込遺跡の火山灰の化学特性 沢船込遺跡出土炭化材の樹種 沢船込遺跡 C-25号土坑から出土した動物遺存体	松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 小林和彦 八戸市博物館学芸員	6点 7点 5号住(縄文)シデ、1・2号住(奈良)クリ
145	唐貝地	分析 樹種同定 同定	火山灰 炭化材 貝類	唐貝地遺跡の火山灰の化学特性 唐貝地遺跡出土炭化材の樹種	三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 佐藤巧 県立郷土館主任学芸員	1点 17点
147	富ノ沢(2VI)	石質鑑定 同定 分析 年代測定 樹種同定 分析 産地同定 同定	種子 火山灰・土器胎土 14 C β線計数法 炭化材 土壌(リン酸) ヒスイ 獣骨 炭化種子	植物遺体 富ノ沢(2)A 遺跡出土火山灰・土器の蛍光X線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 富ノ沢(2)A 遺跡出土の炭化材の樹種 富ノ沢(2)A 遺跡第66号土壌及び第65号土壌の有機酸成分濃度の化学的分析 富ノ沢(2)A 遺跡出土のヒスイ製大珠石製垂飾玉の産地分析 富ノ沢(2)A 遺跡出土の動物遺体 青森県富ノ沢(2)遺跡出土の縄文時代中期の炭化植物種子	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 千葉馨一 八戸工業高等専門学校技官 薬科哲男 京都大学原子炉実験所 西本豊弘 国立歴史民俗博物館助教授 榎坂泰代 北海道大学理蔵文化財調査室 吉崎昌一 北海道大学教授	火山灰2点、縄文土器24点 9点 70点 2基とも土壌墓の可能性大 9点
148	家ノ前・幸畑(7)	自然環境 石質鑑定 産地同定 分析 自然環境 分析	地形・地質・層序 黒曜石 火山灰 地形・地質・層序 石器付着脂肪	遺跡周辺の地形及び地質 家ノ前遺跡出土の黒曜石製遺物の理材産地分析 六ヶ所村家ノ前遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 遺跡周辺の地形・地質 幸畑(7)遺跡遺跡から出土した石器に残存する脂肪の分析	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 薬科哲男 京都大学原子炉実験所文部技官 三辻利一 奈良教育大学教授 松山力 県立八戸高校教諭 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・明瀬雅子・長田正宏 (株)スコーン総合科学研究所	1点 3点 7点の石器に付着した脂肪 動物性脂肪との見解 ナウマンゾウ・オオツノジカ・ニホンジカ・モズ・アカハラ・オットセイ・イルカの脂肪が付着
149	野脇	自然環境 石質鑑定 分析 分析 樹種同定	地形・地質・層序 陶器胎土 火山灰 木製品他	遺跡周辺の地形・遺跡周辺の地質 野脇遺跡出土陶器の蛍光X線分析 野脇遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 出土木製品の樹種同定	松山力 県立八戸高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	16点 1点 32点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	年代	備考
150	野場(5)	年代測定 自然環境 石質鑑定 産地同定 同定 同定 同定	年輪年代 地形・地質・層序 黒曜石 植物遺体 炭化種子 炭化種子	年輪年代法による出土木材の年代測定 遺跡周辺の地形と遺跡の層序 野場(5)遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析 植物遺体 野場(5)遺跡第11号土壌層序土下層部のトチ種子の炭化状態の化学分析 青森県野場(5)遺跡から検出された植物種子について	光谷拓実 奈良文化財研究所主任研究官 松山力 県立八戸高校教諭 藤科哲男 京都大学原子炉実験所文部技官 渡辺誠 名古屋大学教授 小山陽造 八戸工業高等専門学校文部技官 千葉馨一 八戸工業高等専門学校文部技官 榎坂泰代 北海道大学理蔵文化財調査室 吉崎昌一 北海道大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 永嶋正春 国立歴史民俗博物館教授	年代不明 2点 オニグルミ、クリ、トチ 自然炭化 10点 2点	
151	筋久辺	自然環境 分析	自然環境 地形・地質・層序 火山灰	遺跡周辺の地形・地質 火山灰の蛍光X線分析	松山力 県立八戸高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	4点	
152	朝日山II	自然環境 分析	自然環境 地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭		
153	高野川(2)	自然環境 分析	自然環境 地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 光谷拓実 奈良文化財研究所主任研究官 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	15点 5点 10点 (12 C ~ 14 C)	
154	小奥戸(1)	自然環境 分析	自然環境 地形・地質・層序 炭化材 黒曜石	遺跡周辺の地形・地質 小奥戸(1)遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析	嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター主査 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 藤科哲男 京都大学原子炉実験所文部技官	11点 7点	
156	朝日山III	石質鑑定 樹種同定 分析 年代測定 産地同定 分析	炭化材 火山灰 14 C β 線計数法 ヒスイ 須恵器胎土 鉄製品・鍍金 地形・地質・層序	朝日山遺跡出土炭化材の樹種 朝日山遺跡に堆積する火山灰の蛍光X線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 朝日山遺跡出土の玉瑠の産地分析 朝日山遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 朝日山遺跡出土須恵器の金属学的解析 遺跡周辺の地形及び地質について	松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 藤科哲男 京都大学原子炉実験所文部技官 三辻利一 奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 山口義伸 県立板柳高校教諭	15点 15点 1点 37点 20点 11点	内 27 点一糸糸川産
157	三内丸山(2)I	自然環境 石質鑑定 分析 分析 分析	火山灰 須恵器胎土 鉄製品・鍍金 地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質について	松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	8点 30点	
158	内真部(4)	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定 分析	鉄製品・鍍金 地形・地質・層序 陶器胎土 年輪年代	遺跡周辺の地形及び地質について 内真部(4)遺跡出土の陶器の蛍光X線分析 年輪年代法による内真部(4)遺跡出土の井戸材料・曲物の年代測定 内真部(4)遺跡出土鉄器の金属学的解析 遺跡周辺の地形、地質及び遺跡内の層序	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 光谷拓実 奈良文化財研究所主任研究官 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	25点 4点 AD1420年、AD1457年	
159	山元(3)	自然環境 石質鑑定 分析 分析 同定 年代測定 分析	鉄製品・鍍金 地形・地質・層序 漆器 火山灰 須恵器胎土 炭化種子 14 C β 線計数法 鉄製品・鍍金	遺跡周辺の地形、地質及び遺跡内の層序 青森県浪岡町山元(3)遺跡出土漆器の科学的分析 山元(3)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 山元(3)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 青森県山元(3)遺跡出土の炭化植物種子 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 山元(3)遺跡出土鉄器の金属学的解析	松山力 八戸市文化財審議委員 西崎素章 奈良文化財研究所 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 榎坂泰代 北海道大学理蔵文化財調査室 吉崎昌一 北海道大学 木越邦彦 学習院大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	8点 42点 3点 Co分の多いものは原材料は大陵?	全国でも数例の漆皮箱と推定 8点 42点 3点
160	家ノ前II・鷹架II	自然環境 分析	自然環境 地形・地質・層序	遺跡と周辺地域の地形・地質	松山力 八戸市文化財審議委員		

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
	鷹架	石質鑑定 分析 自然環境 石質鑑定	火山灰 地形・地質・層序	家ノ前遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 遺跡と周辺地域の地形・地質	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 松山力 八戸市文化財審議委員 松山力 八戸市文化財審議委員	17点
161	畑内1	石質鑑定 分析 自然環境 年代測定	地形・地質・層序 火山灰 14 C β 線計教法	遺跡周辺の地形・地質 畑内遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 遺跡周辺の地形及び地質	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 山口義伸 県立板柳高校教諭	4点 5点
163	久米川	石質鑑定 分析 自然環境 年代測定	須恵器胎土 火山灰 赤色顔料 14 C β 線計教法 年代測定 14 C β 線計教法 樹種同定 木製品他 樹種同定 木製品他 同定	久米川遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 久米川遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 久米川遺跡出土赤色顔料の分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 八戸工業大学放射性炭素年代測定結果について 久米川遺跡出土木製品の樹種(第1次分) 久米川遺跡出土加工木の樹種(第2次分) 久米川遺跡出土の種子同定	山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸調査員 木越邦彦 学習院大学教授 村中健 八戸工業大学助教授 ハリノ・サウヴェイ(株) 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 ハリノ・サウヴェイ(株)	56点 3点 2点 3点 6点 48点
164	塔ノ沢山(1)・大沢(1)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	松山力 八戸市文化財審議委員	
167	朝日山(3)	石質鑑定 分析 自然環境 樹種同定	火山灰 須恵器胎土 炭化材	火山灰の蛍光X線分析 須恵器の蛍光X線分析 朝日山(3)遺跡出土炭化材の樹種	松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	4点 16点 7点
168	黒森下(1)	石質鑑定 分析 自然環境 年代測定	地形・地質・層序 火山灰 14 C β 線計教法	遺跡周辺の地形・地質及び遺跡内の基本層序 黒森下(1)遺跡出土の蛍光X線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター主査 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	5点 5点
169	槻ノ木(1)	自然環境 石質鑑定 年代測定	地形・地質・層序 14 C β 線計教法 炭化材	遺跡周辺の地形及び地質 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 槻ノ木遺跡出土炭化材の樹種	山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授	2点 3点
170	松山・羽黒平(1)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の自然環境	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭	
171	山元(2)	石質鑑定 分析 自然環境 年代測定	地形・地質・層序 鉄製品・銻滓 火山灰 須恵器胎土 炭化種子	遺跡周辺の地形及び地質について 山元(2)跡出土鉄器・銻滓の金属学的解析 山元(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 山元(2)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 山元(2)遺跡出土の炭化植物種子について	工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 榎坂恭代 北海道大学理蔵文化財調査室 吉崎昌一 北海道大学教務 嶋倉巳三郎 元奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	15点 117点
172	野所(2)	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定	炭化材 14 C β 線計教法 地形・地質・層序 火山灰 須恵器胎土 14 C β 線計教法 鉄製品・銻滓	山元(2)遺跡出土炭化材の樹種 放射性炭素年代測定結果報告書 地学的環境 出土火山灰の蛍光X線分析 出土須恵器の蛍光X線分析 放射性炭素年代測定 出土鉄器の金属学的解析	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター主査 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	50点 5点
173	水木館	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 火山灰	遺跡の地学的環境 水木館遺跡出土火山灰の蛍光X線分析(平成5年度分) 水木館遺跡出土火山灰の蛍光X線分析(平成6年度分)	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター主査 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	4点 5点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		分析 年代測定 年代測定 年代測定 年代測定	須恵器胎土 年輪年代 木材 14 C β 線計数法 14 C β 線計数法	水木館遺跡出土須恵器の炭光 X 線分析 年輪年代法による出土木材の年代測定 木材の材質鑑定について (平成 6 年分) 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 (平成 5 年分) 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 (平成 6 年分) 遺跡周辺の地形と地質	三辻利一 奈良教育大学教授 光谷拓実 奈良文化財研究所主任研究官 兼平文憲 東林業試験場研究管理員 木越邦彦 学習院大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 森本岩太郎 日本赤十字看護大学教授	26 点 2 点 14 点 2 点 2 点 1 点 火葬骨 7 個体
174	千刈(1)	自然環境 石質鑑定 分析 同定	地形・地質・層序 火山灰 人骨	千刈(1)遺跡出土火山灰の炭光 X 線分析 千刈(1)遺跡出土の江戸時代人骨について 遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭 伊藤昭雄 県立板柳高校教諭 伊藤昭雄 県立板柳高校教諭 伊藤昭雄 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学教授	1 点 火葬骨 7 個体
175	湯赤(1)・(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	
176	森田(4)・(5)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	
177	上乾沢(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の位置と地形環境	松山力 八戸市文化財審議委員	
178	畑内 II	同定	人骨	畑内遺跡出土の縄文時代前期人骨について 遺跡の環境	森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学教授	3 基 フラスコ状ヒットから 6 体分、221 号土壙 4 体合葬
179	高野川(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の環境	山口義伸 県立板柳高校教諭	
180	熊ヶ平 熊ヶ平・板子塚 板子塚	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 脂肪酸	遺跡周辺の地形と地質 熊ヶ平遺跡から出土した炭化物に残存する脂肪の分析 放射性炭素年代測定報告書 遺跡周辺の地形及び地質について 板子塚遺跡出土火山灰の炭光 X 線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 板子塚遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析 板子塚遺跡出土の玉類の原産地分析 板子塚遺跡出土の玉類の原産地分析 板子塚遺跡出土須恵器の赤外線分析法による分析 板子塚遺跡出土鉄片の金属学的解析 板子塚遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析	山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 中野寛子・明瀬雅子・長田正安 (株) スコーン総合科学研究所 (株) 地球科学研究所 山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 薬科哲男 京都大学原子炉実験所 薬科哲男 元京都大学教授 薬科哲男 京都大学原子炉実験所 東村武信 元京都大学教員 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 中野寛子 帯広畜産大学 中野寛子・菅原利佳・長田正安 (株) スコーン総合科学研究所	6 点 3 点 28 点 4 点 硬玉 3 点は糸魚川産と判定 1 点 脂肪族炭水素系化合物を主成分とする 縄文時代の鉄片の可能性があると分析を行っている ヒトの骨のみの埋蔵試料に類似の結果が出ている
181	泉山	自然環境 石質鑑定 分析 産地同定 産地同定	地形・地質・層序 火山灰 ヒスイ他 コハク(成分) 鉄片 土壌	遺跡と周辺地域の地形・地質 泉山遺跡出土火山灰の炭光 X 線分析 泉山遺跡出土の玉類の原産地分析 泉山遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 遺跡の周辺地域の地形・地質 塔ノ沢山(2)遺跡出土炭化材の樹種	松山力 八戸市文化財審議委員 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 薬科哲男 京都大学原子炉実験所 薬科哲男 元京都大学教授 東村武信 元京都大学教員 木越邦彦 学習院大学教授 松山力 八戸市文化財審議委員 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 伊藤昭雄 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	2 点 6 点 6 点 4 点 1 点
183	塔ノ沢山(2)	自然環境 石質鑑定 分析 産地同定	14 C β 線計数法 地形・地質・層序 炭化材	遺跡周辺の地形及び地質 野尻(2)遺跡出土火山灰の炭光 X 線分析 野尻(2)遺跡出土須恵器の炭光 X 線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 嶋倉日三郎 元奈良教育大学教授 伊藤昭雄 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	1 点 14 点 24 点 5 点
185	三内丸山(2)IV	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	
186	野尻(2)・(3)・(4)	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定	地形・地質・層序 火山灰 須恵器胎土 14 C β 線計数法	野尻(2)遺跡出土火山灰の炭光 X 線分析 野尻(2)遺跡出土須恵器の炭光 X 線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	14 点 24 点 5 点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
野原(3)	火山灰 須恵器胎土 14 C β線計数法 土壌(リン・脂肪他)	分析 年代測定 分析	火山灰 須恵器胎土 14 C β線計数法 土壌(リン・脂肪他)	野原(3)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 野原(3)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 宇習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 浪岡野原(3)遺跡第6号円形周溝土壌の残留有機酸濃度と 残留脂質成分組成及び出土人骨粉(動物骨)分布と焼成 状況の研究 野原(2)・(3)遺跡出土鉄器の金属学的解析 遺跡周辺の地形及び地質 鉄器の金属学的解析 野原(4)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 野原(4)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 宇習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	三辻利一 三辻利一 木越邦彦 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授 岩手県立博物館専門学芸員 山口義伸 岩手県立博物館専門学芸員 赤沼英男 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 宇習院大学教授	14点 32点 5点 平安時代の火葬と古墳埋葬における階層社会についても言及 4点 砂鉄使用による銅を素材としている 48点 80点 8点
187	畑内III	石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡と周辺地域の地形・地質	松山力 八戸市文化財審議委員	
188	四ッ役	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	松山力 八戸市文化財審議委員 伊藤昭雄 県埋蔵文化財調査センター主査		
189	白砂	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 火山灰	遺跡周辺の地形と地質 白砂遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	佐藤巧 県立郷土館学芸主任 三辻利一 奈良教育大学教授	3点
190	泉山III	石質鑑定	人骨	三戸町泉山遺跡出土の縄文時代人骨	松山力 八戸市文化財審議委員	付章として写真のみ掲載
191	佐野平館・上佐野	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 火山灰	遺跡周辺の地学的環境 佐野平館・上佐野遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	2点
192	戸沢川代・熊ヶ平	自然環境 石質鑑定 年代測定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質 宇習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 木越邦彦 宇習院大学教授	1点
193	平野	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 火山灰 須恵器胎土	遺跡の地形と地質 平野遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 平野遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授	8点 10点
194	羽黒平(1)	自然環境 石質鑑定 分析 分析 分析 分析	地形・地質・層序 鉄製品・鉄滓 プラントオパール 寄生虫・花粉 火山灰(屈折率他)	遺跡周辺の地形及び地質 羽黒平(1)遺跡出土鉄製遺物の材質と鉄関運河の機能 羽黒平(1)遺跡における植物珪酸体分析 羽黒平(1)遺跡における寄生虫卵分析・花粉分析 羽黒平(1)遺跡の土層とアフラ 松山・羽黒平(1)遺跡出土鉄器の金属学的解析	山口義伸 県立板柳高校教諭 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員 綱古環鏡研究所 綱古環鏡研究所 赤沼英男 岩手県立博物館専門学芸員	寄生虫卵は確認されない 補遺編として掲載 担当の小田川が一部加筆
196	洞内城跡	自然環境	地形・地質・層序	遺跡の立地と基本層序	松山力 八戸市文化財審議委員	
197	西張(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡の立地と基本層序	松山力 八戸市文化財審議委員 山口義伸 県立板柳高校教諭	
198	上蛇沢(1)	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 脂肪酸 土器内土壌	遺跡の位置と自然的環境 第1号埋設土器に残存する脂肪の分析	松山力 八戸市文化財審議委員 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・長田正宏 (株)スコーン総合科学研究所	ヒトの骨のみの埋葬による脂肪に類似する結果
199	大平(5)・草葎(1)・湯ヶ森(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭	
200	十三湊I	自然環境	地形・地質	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	
205	三内丸山VI	自然環境 分析 同定	地形・地質 古環境・花粉 動物遺体	三内丸山遺跡の地形及び地質 植物相からみた三内丸山遺跡 三内丸山遺跡出土の動物遺体の概要	山口義伸 注藤一郎 国立歴史民俗博物館 西本豊弘 国立歴史民俗博物館助教 樋島岳二 国立歴史民俗博物館	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
207	栗吉	自然環境 石質鑑定 分析 須恵器胎土 樹種同定 年代測定 分析	地形・地質・層序 火山灰 須恵器胎土 木製品他 種子 14 C β 線計教法 アスファルト	遺跡周辺の地形と地質 火山灰の蛍光 X 線分析 須恵器・土師器の蛍光 X 線分析 木製品の樹種 権美同定 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 天然アスファルト放射性物質の分析	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター総括主査 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 ハリノ・サウヴェイ (株) ハリノ・サウヴェイ (株) 木越邦彦 学習院大学教授	6点 須恵器 11点、摺文 1点、土師器 30点 19点 内 14点は角材、板材など 井戸跡・堆積物 タテ類 5点 若手県坂田遺跡出土ものとは異なるとの見解だけ 国内各産地との比較は全く行っていない
208	桜ヶ峰(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター総括主査	
209	隈無(4)	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定 分析	地形・地質・層序 火山灰 14 C β 線計教法	遺跡周辺の地形と地質 火山灰の蛍光 X 線分析 放射性炭素年代測定	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター総括主査 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	4点 2点
210	隠川(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	伊藤昭雄 県理蔵文化財調査センター総括主査	
211	畑内IV	石質鑑定 年代測定 分析	14 C β 線計教法 脂肪酸 土器内土壤	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 畑内遺跡から出土した土器に残存する脂肪酸の分析	松山力 八戸市文化財審議委員 木越邦彦 学習院大学教授 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・菅原利佳・長正宏 (株)ズコーンシャ総合科学研究所 松山力 八戸市文化財審議委員 小林利彦 八戸市南文学部学芸員	1点 ヒト遺体または、胎盤を埋葬した跡料と類似の結果 担当の木村鐵次郎(埋文センター)と共編
212	八釜久保(2)・(3)・幸神	石質鑑定 分析	火山灰	八釜久保(3)遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授	1点 197集の同文に変更及び一部付加
213	石焼沢・西張(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	松山力、七崎修、伊藤昭雄 松山力 八戸市文化財審議委員	
214	田名部館跡	自然環境 同定 樹種同定 年代測定 分析	地形・地質・層序 種実 木製品他 14 C β 線計教法	遺跡と周辺の地形と地質 田名部館跡の種実 田名部館跡から出土した木製品の樹種同定 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 ハリノ・サウヴェイ (株) ハリノ・サウヴェイ (株) 木越邦彦 学習院大学教授	3点 2点
215	朝日山(3)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形と地質	山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員	
216	近野V	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭	
217	宇田野(2)・(3)・草薙(3)	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定 分析	地形・地質・層序 火山灰 14 C β 線計教法	遺跡周辺の地形及び地質 火山灰の蛍光 X 線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県立板柳高校教諭 山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授 山口義伸 県立板柳高校教諭	6点 6点
218	櫛(2)	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	
219	垂柳・五輪野	自然環境 石質鑑定 年代測定 分析	地形・地質・層序 14 C β 線計教法 須恵器胎土 鉄製品・鍍浮	垂柳・五輪野遺跡と周辺の地形・地質 垂柳遺跡の炭素年代分析 五輪野遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析 五輪野遺跡出土鉄器の材質	松山力 八戸市文化財審議委員 松山力 八戸市文化財審議委員 木越邦彦 学習院大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 赤沼英男 若手県立博物館専門学芸員	3点 10点 10点
220	小沢館跡	自然環境 年代測定 分析	地形・地質・層序 14 C β 線計教法	館跡周辺の地形・地質と基本層序 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 木越邦彦 学習院大学教授	1点
221	津山	自然環境 石質鑑定 分析 年代測定 分析	地形・地質・層序 火山灰 須恵器胎土 14 C β 線計教法	遺跡周辺の地形及び地質 出土火山灰の蛍光 X 線分析 出土須恵器の蛍光 X 線分析 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	山口義伸 県立板柳高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学教授 三辻利一 奈良教育大学教授 木越邦彦 学習院大学教授	2点 2点 3点 3点
222	幸畑(0)・(6)・(3)	自然環境 石質鑑定 分析	火山灰	幸畑(3)遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	山口義伸 県立板柳高校教諭 三辻利一 奈良教育大学教授 七崎修 元県立八戸北高校教諭	1点
223	松籠	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	八戸市松籠遺跡の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	分析者	備考
251	三内丸山X-1	石質鑑定 産地同定	黒曜石	三内丸山遺跡第6次調査区出土の黒曜石製遺物の原材産地分析	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	5点 遺体埋葬は想定できるが、断定できない
253	下馬坂	石質鑑定 分析	脂肪酸		齋科哲男 京都大学原子炉実験所 パリノ・サ・ヴェイ (株)		
254	戸沢	石質鑑定 年代測定	14 C β 線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員	松山力 八戸市文化財審議委員	1点
255	安田(2)	石質鑑定	地形・地質・層序		木越邦彦 学習院大学教諭	木越邦彦 学習院大学教諭	
256	新納屋(1)	石質鑑定	地形・地質・層序		山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	
257	三内丸山(6)	自然環境 石質鑑定		遺跡周辺の地形及び地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	
258	山下・上野尻	石質鑑定	木製品・炭化材	宮田地区山下遺跡から出土した木製品・炭化材の樹種	松山力 八戸市文化財審議委員	松山力 八戸市文化財審議委員	12点 2点
259	山下 野尻(1)	樹種同定 年代測定	14 C β 線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	パリノ・サ・ヴェイ (株)	パリノ・サ・ヴェイ (株)	
260	隠川(10)・(12)II	石質鑑定 分析	土器胎土	野尻(1)遺跡出土土器の蛍光X線分析	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	120点
	隠川(10)	石質鑑定 分析	火山灰	石製遺物の非破壊分析による水和層の測定	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	1点
	隠川(10)	石質鑑定 分析	土器胎土	火山灰の蛍光X線分析	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	3点
	隠川(10)	年代測定	14 C β 線計数法	出土土器の放射性炭素年代測定 1	三辻利一 奈良教育大学教授	三辻利一 奈良教育大学教授	45点
	隠川(10)	年代測定	14 C AMS	炭化材の放射性炭素年代測定 2	木越邦彦 学習院大学教諭	木越邦彦 学習院大学教諭	2点
	隠川(10)	分析	漆	炭化材の放射性炭素年代測定 2	(株)地球科学研究所	(株)地球科学研究所	1点
	隠川(10)	分析	脂肪	漆塗塗形土器の科学的分析 漆塗塗形土器の科学的分析 漆塗塗形土器の科学的分析	四柳嘉章 漆器文化財科学研究所 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子 星山賢一	漆器文化財科学研究所 帯広畜産大学 星山賢一	
261	隠川(10) 十腰内(1)	産地同定 樹種同定	黒曜石 炭化材	黒曜石製遺物の原材産地分析 炭化材の樹種同定	齋科哲男 京都大学原子炉実験所 高橋利彦 木工舎「ゆい」	齋科哲男 京都大学原子炉実験所 高橋利彦 木工舎「ゆい」	17点 2点
	十腰内(1)	石質鑑定 鑑定	材質	十腰内(1)遺跡から出土した容器状物質の材質鑑定	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	5点
	十腰内(1)	年代測定	14 C β 線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	土合信高 岩手大学教育学部地学教育助教授	土合信高 岩手大学教育学部地学教育助教授	15点
	十腰内(1)	産地同定	黒曜石	十腰内(1)遺跡出土黒曜石製遺物の原材産地分析	木越邦彦 学習院大学教諭	木越邦彦 学習院大学教諭	19点
	十腰内(1)	産地同定	玉類	十腰内(1)遺跡出土玉類、玉材の非破壊による産地分析	齋科哲男 京都大学原子炉実験所	齋科哲男 京都大学原子炉実験所	10点
	十腰内(1)	樹種同定	炭化材	弘前市十腰内(1)遺跡出土炭化材の樹種	高橋利彦 木工舎「ゆい」	高橋利彦 木工舎「ゆい」	
262	畑内V	石質鑑定 年代測定	14 C β 線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員	松山力 八戸市文化財審議委員	4点
	畑内V	樹種同定	炭化材	畑内遺跡出土炭化材の樹種同定	木越邦彦 学習院大学教諭	木越邦彦 学習院大学教諭	3点
263	櫛引	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形と地質	七崎修 元県立八戸北高校教諭	七崎修 元県立八戸北高校教諭	5点
	櫛引	年代測定	14 C AMS	放射線炭素年代測定結果報告書	松山力 地球科学研究所	松山力 地球科学研究所	8点
	櫛引	産地同定	黒曜石	放射線炭素年代測定結果報告書	齋科哲男 京都大学原子炉実験所	齋科哲男 京都大学原子炉実験所	5点
	櫛引	分析	須恵器胎土	須恵器の蛍光X線分析	三辻利一 奈良教育大学教授	三辻利一 奈良教育大学教授	2点 深浦産と判定
	櫛引	分析	炭化材	火入灰の蛍光X線分析	三辻利一 奈良教育大学教授	三辻利一 奈良教育大学教授	8点
264	野木II	石質鑑定 分析	土師器胎土	土師器の蛍光X線分析	松山力 八戸市文化財審議委員	松山力 八戸市文化財審議委員	60点
	野木II	年代測定	14 C AMS	放射線炭素年代測定結果報告書	(株)地球科学研究所	(株)地球科学研究所	4点
	野木II	同定	プラントオパール	プラントオパール分析、花粉分析	鈴木茂 (株)パレオ・ラボ	鈴木茂 (株)パレオ・ラボ	
266	高岩(1)・(2)・白蛇(1)・鳥河岸 十三瀬IV	石質鑑定	地中レーダー探査	地中レーダー探査による青森県十三瀬遺跡の推定浸透施設の調査	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	
268	三内丸山(5)	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形および地質	浦井英男・野村成宏・眞雅敬 富山大学、工藤忍 県立化理	浦井英男・野村成宏・眞雅敬 富山大学、工藤忍 県立化理	
269	三内丸山(5)	石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形および地質	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	
270	大矢沢野田(1)	自然環境 石質鑑定	地形・地質	遺跡周辺の地形及び地質(二つについて)	山口義伸 県立板柳高校教諭	山口義伸 県立板柳高校教諭	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
271	モダシ平	石質鑑定 植生	花粉化石 地形・地質・層序	大矢沢野田(1)遺跡の縄文時代以降の植生史 一花粉化石群にもとづく植生復元と変遷史 モダシ平遺跡周辺の地形と地質	山口薫伸 県立坂柳高校教諭 古代の森研究会 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
272	柳引川	石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡周辺の地形・地質	松山力 八戸市文化財審議委員	
273	丹内	石質鑑定 自然環境 樹種同定 年代測定	炭化材 14 C AMS	丹内遺跡から出土した炭化材の樹種 放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 ハリノ・サヴェイ (株) (株) 地球科学研究所	9点 奈良時代焼失住居部材 1点 すべてコナラ
274	山下II・米山(2) 山下	石質鑑定 年代測定	14 C β 線計数法	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 木越邦彦 学習院大学教授	1点 同位体の比率も記載
275	新町野	自然環境 石質鑑定 年代測定 樹種同定 炭化材 火山灰 須臾器胎土 熱残留磁気	地形・地質・層序 14 C AMS 炭化材 火山灰	周辺環境 新町野遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定 新町野遺跡出土炭化材の樹種 新町野遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 新町野遺跡出土須臾器の蛍光 X 線分析 新町野遺跡の考古地磁気学的研究	工藤一彌 県総合学校教育センター 松山力 八戸市文化財審議委員 (株) 地球科学研究所 高橋利彦 木工舎「ゆい」 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 広岡公夫・道坂ゆかり・翼雅敬 富山大学地球科学教室	4点 3点 7点 12点
276	細内VI	石質鑑定	火山灰	火山灰の蛍光 X 線分析	松山力 八戸市文化財審議委員	
277	野尻(1)III	石質鑑定 分析 分析 分析	土器胎土 脂肪酸	土器の蛍光 X 線分析 第 301 号土器埋設遺構に残存する脂肪酸の分析	山口薫伸 県史編纂室総括主任 三辻利一 奈良教育大学 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・清水了・門利恵・星山賢一 (株) スコーンシャヤ総合科学研究所 (株) 地球科学研究所 (株) 古環境研究所 (株) 古環境研究所 (株) 古環境研究所 (株) 古環境研究所 (株) 古環境研究所	16点 須臾器・土師器・縄文土器・粘土など117点 ヒト遺体の直接埋納の脂肪と類似している
278	餅ノ沢	年代測定 樹種同定 同定 同定 同定	14 C AMS 種実 プラントオパール 花粉 種実	放射性炭素年代測定結果報告書 第 301 号井戸跡出土木材の樹種同定 第 301 号井戸跡出土種実の同定 第 301 号並列溝状遺構のプラントオパール分析 第 301 号並列溝状遺構における花粉分析 第 301 号並列溝状遺構における種実同定	山口薫伸 県史編纂室総括主任 齋科哲男 京都大学原子炉実験所 齋科哲男 京都大学原子炉実験所 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・清水了・門利恵・星山賢一 (株) スコーンシャヤ総合科学研究所 赤沼英男 岩手県立博物館	21点 4点 2点はヒトの骨の骨のみの埋納、3点はヒト遺体の直接埋納の脂肪に類似している 6点
279	三内丸山(6)II 第一分冊 第二分冊	石質鑑定 分析 同定 年代測定 分析	黒曜石・安山岩 産地同定 産地同定 産地同定 分析 土器塗膜 炭化種子 14 C β 線計数法 脂肪酸	餅ノ沢遺跡出土黒曜石、安山岩製造物の原材料地分析 餅ノ沢遺跡出土玉類の産地分析 餅ノ沢遺跡から出土した遺構に残存する脂肪酸の分析 餅ノ沢遺跡出土粘土状物質の自然科学的調査結果 青森県三内丸山(6)遺跡出土の土器外面に見られる塗膜について 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 三内丸山(6)遺跡から出土した土坑に残存する脂肪酸の分析	山口薫伸 県史編纂室総括主任 (株) 吉田生物研究所 齋藤由美子 県埋蔵文化財調査センター 木越邦彦 学習院大学教授 中野益男 帯広畜産大学 中野寛子・清水了・門利恵・星山賢一 (株) スコーンシャヤ総合科学研究所 齋科哲男 京都大学原子炉実験所 松山力 八戸市文化財審議委員	漆膜 下地塗り無し・未精製の漆の1回塗り 付章に記載 4点 補正年代値 $\delta 13 C$ 値も記載 ヒト遺体の埋納による脂肪に類似 211号土坑はヒト女性の埋納の可能性あり
280	砂子	産地同定 自然環境 分析 年代測定 分析	黒曜石 地形・地質・層序 火山灰 14 C AMS 鉄製品・鉄滓	三内丸山(6)遺跡出土の黒曜石製造物の原材料地分析 砂子遺跡と周辺地域の地形・地質 砂子遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 放射性炭素年代測定結果報告書 出土遺物の組成からみた砂子遺跡における鉄器製作とその使用	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学 (株) 地球科学研究所 赤沼英男 岩手県立博物館	9点 2点 8点

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		樹種同定 同定 分析	炭化材 種実 プラントオパール・花粉 土壌微細形態	青森県南郷村砂子遺跡出土炭化材の樹種同定 砂子遺跡から出土した炭化種実 砂子遺跡のプラントオパール分析及び花粉分析 砂子遺跡第24号竪穴住居跡床面の土壌微細形態について	種田弥生 (株) ハレオ・ラボ 新山雅広 (株) 古環境研究所 宮路淳子 京都文教大学 松井章 奈良文化財研究所 平山良治 国立科学博物館	14点 焼灰家屋(10世紀) 部材 すべてコロナ
281	野木Ⅲ	石質鑑定 分析 年代測定 樹種同定 分析 分析 分析 同定 樹種同定 同定 分析 分析 分析	土器胎土 火山灰 AMS AMS 木材 銅製品 塗膜 鉄製品・鍍金 炭化種子 炭化材 種実 水質 土壌微細形態	野木遺跡出土土器の蛍光X線分析 野木遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 放射性炭素年代測定結果報告書 青森県野木遺跡出土木材の樹種 野木遺跡出土銅製破片の金属考古学調査結果 野木遺跡出土木製櫛歯と漆の自然科学的調査結果 鉄関連遺物の形状と組成からみた野木遺跡における鉄器製作 とその使用 青森県野木遺跡出土平安時代の炭化植物種子 青森市野木遺跡出土炭化材の樹種 野木遺跡より産出した大型植物化石 野木遺跡水場遺構湧水の水質 野木遺跡状況遺構の土壌微細形態について	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 (株) 地球科学研究所 能成修一 森林総合研究所 鈴木三男 東北大学附属植物園 赤沼英男 岩手県立博物館 赤沼英男 岩手県立博物館 赤沼英男 岩手県立博物館 吉崎昌一 札幌国際大学 樺坂泰代 北海道大学理職文化財調査室 高橋利彦 木工舎「ゆい」 吉川純子 古代の森研究所 劉馬康夫 青森市下水道部 宮路淳子 京都文教大学 松井章 奈良文化財研究所 平山良治 国立科学博物館	須恵器・土師器・粘土など 193点 11点 3点 278点 鉄器 10点、その他6点 20点 成分上では良質のおいしい水
283	三内丸山XV	石質鑑定		遺跡周辺の地形及び地質について	山口義伸 県史編纂室総括主幹	
285	山ノ越	自然環境 石質鑑定 樹種同定	地形・地質・層序 炭化材		山口義伸 県史編纂室総括主幹 山口義伸 県史編纂室総括主幹 兼平文憲 青森県林業試験場	遺構報告中に同定結果のみを記載
286	十三湊V	探査	地中レーダー探査	地中レーダー探査による青森県十三湊遺跡の推定溝溝施設 の調査	酒井英男・中澤書元・前川要 富山大学 工藤忍・鈴木和子 県文化課 田中賢次 田中地質コンサルタント	
287	岩ノ沢平	自然環境 石質鑑定 年代測定 樹種同定 分析 分析 分析 分析	地形・地質 AMS AMS 木製品 鉄製品・鍍金 須恵器胎土 火山灰	遺跡周辺の地質 放射性炭素年代測定結果報告書 青森県岩ノ沢平遺跡B区S1 69Pit 1から出土した木材の 樹種同定結果 岩ノ沢平遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果 須恵器の蛍光X線分析 火山灰の蛍光X線分析	七崎修 元県立八戸北高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 (株) 地球科学研究所 松葉礼子 (株) ハレオ・ラボ	4点 1点 31点 34点 7点
288	三内丸山XVI	石質鑑定			山口義伸 県史編纂室総括主幹	
289	三内丸山XVII	石質鑑定			山口義伸 県史編纂室総括主幹	
291	松ヶ崎	自然環境 石質鑑定	地形・地質・層序	遺跡と周辺地域の地形・地質	松山力 八戸市文化財審議委員 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
292	蟹沢(2)	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 脂防酸	遺跡と周辺地域の地形・地質 蟹沢(2)遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析	松山力 八戸市文化財審議委員 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 中野益男 帯広畜産大学 中野眞子・清水了・門利恵・星山賢一 (株) スコーンチャ総合科学研究所	ヒト遺体(幼児)の可能性あり
293	宮本(2)	自然環境 石質鑑定 年代測定	地形・地質・層序	遺跡の地形と地質について	島口天 県立郷土館 松山力 八戸市文化財審議委員 (株) 地球科学研究所	2点
294	栄山(3)	石質鑑定	AMS	放射性炭素年代測定結果報告書	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
295	隠川(0)II	石質鑑定			佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
296	上野平(3)	石質鑑定			松山力 八戸市文化財審議委員	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		年代測定 分析	14 C β 線計数法 土器胎土 地形・地質・層序	放射性炭素年代測定結果報告書 上野平③遺跡出土土器の蛍光 X 線分析	木越邦彦 学習院大学教授 三辻利一 奈良教育大学	1 点 同位体の比率及び補正年代値も記載 6 点
297	上野	自然環境 石質鑑定 年代測定 同定	地形・地質・層序 AMS 人骨	遺跡周辺の地形と地質 放射性炭素年代測定結果報告書 上野遺跡土坑墓出土人骨報告	七崎修 元東立八戸北高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 (株)地球科学研究所 百々幸雄 東北大学大学院教授 奈良豊史・鈴木敏彦ほか 東北大学大学院 江戸時代	3 点
298	朝日山(2)	自然環境 石質鑑定 年代測定 分析	地形・地質・層序 AMS 火山灰	遺跡の地形と地質 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 放射性炭素年代測定結果報告書 朝日山(2)遺跡出土の蛍光 X 線分析	島口天 県立郷土館 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 木越邦彦 学習院大学教授 (株)地球科学研究所 三辻利一 奈良教育大学	1 点 同位体の比率も記載 3 点 3 点
299	桜ヶ峰(1)	自然環境 石質鑑定 分析	地形・地質・層序 AMS 土器胎土	遺跡周辺の地形と地質 出土土器の蛍光 X 線分析	伊藤昭雄 県立木造高校教諭 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 三辻利一 奈良教育大学	21 点
300	岩渡小谷(2)	石質鑑定 年代測定 同定	AMS 木材 プラントオパール	放射性炭素年代測定結果報告書 青森市岩渡小谷②遺跡出土木材の樹種 岩渡小谷②遺跡におけるプラントオパール分析	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 (株)地球科学研究所 高橋利彦 木工舎「ゆい」 (株)古環境研究所	2 点 11 点 6 点
301	岩ノ沢平 II	石質鑑定 分析 年代測定 分析	火山灰 AMS 脂肪酸他	岩ノ沢平遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 放射性炭素年代測定結果報告書 方形周溝に残存するリン・カルシウム、脂肪酸分析	松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学 (株)地球科学研究所 バリノ・サウヴェイ (株)	8 点 6 点 遺体と供物の可能性もあるが断定し得ない
302	上野尻 II	石質鑑定 年代測定 分析 同定	AMS リン・カルシウム 炭化材ほか	出土炭化材の放射性炭素年代測定結果報告書 リン・カルシウム分析及び樹種同定 リン・カルシウム分析及び樹種同定	松山力 八戸市文化財審議委員 (株)地球科学研究所 バリノ・サウヴェイ (株) バリノ・サウヴェイ (株)	3 点
303	安田(2) II	石質鑑定			松山力 八戸市文化財審議委員 山口毅俊 県史羅漢室総括主幹 (株)地球科学研究所	土坑内の燃焼材と灰中のプラントオパール
304	十腰内(1) II	石質鑑定 年代測定	AMS	放射性炭素年代測定結果報告書	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 (株)地球科学研究所	3 点
305	笹ノ沢(2)・(3)	自然環境 石質鑑定 年代測定 年代測定 産地同定 分析 分析	地形・地質 AMS AMS β 線計数法 黒曜石 大珠 石器付着物・顔料 脂肪酸他	遺跡周辺の地形と地質 放射性炭素年代測定結果報告書 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 笹ノ沢(3)遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析 笹ノ沢(3)遺跡出土大珠の非破壊による蛍光 X 線分析 笹ノ沢(3)遺跡出土石器付着物の分析 笹ノ沢(3)遺跡出土土質の内容物に関する自然科学的調査	七崎修 元東立八戸北高校教諭 (株)地球科学研究所 松山力 八戸市文化財審議委員 木越邦彦 学習院大学教授 藤科哲男 京都大学原子炉実験所 藤科哲男 京都大学原子炉実験所 バリノ・サウヴェイ (株) バリノ・サウヴェイ (株)	5 点 2 点 1 点 岩石を特定できない 何如かの変成岩帯に由来するもの 黒色一素材不明、赤色一ベンガラまたは土壌中の鉄分 172 号土坑一貯蔵穴から墓坑へ転用か
306	黒坂	自然環境 石質鑑定 分析 分析 分析 分析 分析 年代測定 同定 同定 同定 同定	地形・地質・層序 AMS 火山灰 土器胎土ほか 瓦胎土 瓦胎土ほか 赤色顔料 銅合金・ガラス AMS プラントオパール 樹種 土壌 植物遺体	遺跡の環境 黒坂遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 黒坂遺跡出土土器の蛍光 X 線分析 黒坂遺跡瓦窯出土瓦の蛍光 X 線分析 黒坂遺跡出土瓦および関連試料の胎土分析 黒坂遺跡出土赤色物質の自然科学的調査結果 黒坂遺跡出土銅合金資料およびガラスの非破壊分析結果 放射性炭素年代測定結果報告書 黒坂遺跡の自然科学的調査 植物遺体分析 樹種同定 水洗選別同定 種実同定	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 松山力 八戸市文化財審議委員 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 バリノ・サウヴェイ (株) 赤沼英男 岩手県立博物館 赤沼英男 岩手県立博物館 (株)地球科学研究所 バリノ・サウヴェイ (株)	12 点 縄文土器 50 点、粘土 9 点、土師器・須恵器 58 点 瓦 74 点 25 点 試料粉砕による鉱物組成からの分析 6 点 10 点 8 点 以下 4 種セットの分析 15 点を同定

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
307	三内丸山(6)III	同定	アスファルト	青森県三内丸山(6)遺跡出土アスファルトの成分分析	小笠原正明 北海道大学高等機能開発総合センター 元興寺文化財研究所	秋田県二井産 久慈及びいわき産に最も近いが産地を限定できない
308	畑内VII	石質鑑定 樹種同定 産地同定 分析 同定 同定 同定 年代測定	琥珀 炭化材 黒曜石 土器胎土 炭化種子 獣骨・魚骨 プラントオパール・花粉 14 C AMS	三内丸山(6)遺跡出土琥珀分析報告書 南郷村畑内遺跡第126号住居跡出土炭化材の樹種 畑内遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析 畑内遺跡出土前期および中期縄文土器の蛍光X線分析研究 畑内遺跡から出土した動物遺存体 第1号歌状遺構の自然科学的分析 放射性炭素年代測定結果報告書	松山力 八戸市文化財審議委員 高橋利彦 木工舎「ゆい」 齋科哲男 京都大学原子炉実験所 マーク・ホール 新潟県立歴史博物館 斎藤由美子 東理蔵文化財調査センター 小林和美子 八戸市縄文学習館 (株) 古環境研究所 (株) 地球科学研究所 佐藤巧 青森県史編纂室長補佐 山口義伸 県史編纂室総括主幹 山口義伸 県史編纂室総括主幹 杉本恒美 桐蔭横浜大学工学部 山口義伸 県史編纂室総括主幹 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 奈良真史 仙台医療技術専門学校 鈴木敏彦・川久保善智・澤田純明 佐伯史子・百々幸雄 東北大学大学院 藤原弘明 五所川原市教育委員会 米田輝 国立環境研究所 (株) 地球科学研究所 ハリノ・サヴェイ (株) (株) 古環境研究所 汐見真 (株) 吉田生物研究所 岡田文男 京都造形芸術大学 (株) 吉田生物研究所 松山力 八戸市文化財審議委員	2点 5点 72点 21点 6種 2点
311	長瀧池	石質鑑定			佐藤巧 青森県史編纂室長補佐 山口義伸 県史編纂室総括主幹	
312	十三湊VI	探索	音波探査	十三湊地区での音波探査実験について	山口義伸 県史編纂室総括主幹 杉本恒美 桐蔭横浜大学工学部	
313	隈無(8)	石質鑑定 分析 分析 同定	土器胎土 火山灰 人骨	隈無(8)遺跡出土土器の蛍光X線分析 隈無(8)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析 青森県五所川原市隈無(8)遺跡出土人骨について	山口義伸 県史編纂室総括主幹 三辻利一 奈良教育大学 三辻利一 奈良教育大学 奈良真史 仙台医療技術専門学校 鈴木敏彦・川久保善智・澤田純明 佐伯史子・百々幸雄 東北大学大学院 藤原弘明 五所川原市教育委員会 米田輝 国立環境研究所 (株) 地球科学研究所 ハリノ・サヴェイ (株) (株) 古環境研究所 汐見真 (株) 吉田生物研究所 岡田文男 京都造形芸術大学 (株) 吉田生物研究所	土師器・須恵器 80点 8点
314	小奥戸(4)II	分析	漆膜	隈無(8)遺跡出土の動物遺存体 隈無(8)遺跡出土人骨における放射性炭素年代測定 炭化物・木製品・動物遺存体の放射性炭素年代測定 隈無(8)遺跡における内容物について 隈無(8)遺跡における種葉同定 青森県隈無(8)遺跡出土木製品の樹種	ウマ他 7点 近世の人間の14 C年代測定 13点 近世の試料の14 C年代測定 11点 45点 50点 近世漆器 3点	
315	近野VI	石質鑑定 樹種同定	木製品	青森県隈無(8)遺跡出土土器の塗膜分析	松山力 八戸市文化財審議委員	
316	朝日山(2)II	石質鑑定		青森市近野遺跡出土材の樹種	松山力 八戸市文化財審議委員 高橋利彦 木工舎「ゆい」	5点
317	蟹沢(3)・黒坂II	自然環境 石質鑑定 分析 同定	地形・地質・層序 リン・カルシウム、脂肪酸 人骨	遺跡周辺の地形と地質 土坑の内容物に関する自然科学的分析 八戸市黒坂遺跡出土近世人骨について	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 ハリノ・サヴェイ (株) 井本博文・瀬川涉 東北大学大学院 松山力 八戸市文化財審議委員	3基の土坑 遺体など動物性のものが埋納された可能性あり 補足として記載
318	笹ノ沢(3)II	石質鑑定		野辺地蟹田(10)遺跡及び向田(20)・(3)遺跡周辺の地形と地質	松山力 八戸市文化財審議委員 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
319	野辺地蟹田(10)・向田(20)・(3)	石質鑑定	地形・地質・層序	野辺地蟹田(10)遺跡及び向田(20)・(3)遺跡周辺の地形と地質	佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭	
320	野尻(1)IV	石質鑑定 分析 分析 年代測定 樹種同定 分析 分析 年代測定 同定	地形・地質・層序 土器胎土 火山灰 火山灰 14 C AMS 炭化材 赤色顔料	遺跡の地形及び地質 野尻(1)遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析 風倒木痕採取火山灰の蛍光X線分析 風倒木痕堆積土の火山灰分析 出土炭化物の放射性炭素年代測定結果 浪岡野尻(1)遺跡出土炭化材の樹種 第413・414号土坑出土赤褐色顔料混在土の自然科学的 調査結果 遺跡内土壌の自然科学的分析結果 野尻(1)遺跡の土層とテフラ 野尻(1)遺跡における放射性炭素年代測定 野尻(1)遺跡における花粉分析 野尻(1)遺跡における植物遺存体分析	52点 2点 11点 10点 15点 6点 以下4種セットの分析 1点 測定機関が不明 5点	

集番号	遺跡名	種類	内容	分析名	分析者	備考
		年代測定 産地同定 同定 同定 分析 同定 分析 分析 分析 同定	14C AMS 黒曜石 動物遺存体 人骨 漆 木材 種実 鉄製品・鍍金 銅 ガラス 動物遺存体	放射性炭素年代測定結果報告 畑内遺跡出土黒曜石製石器の産地分析 畑内遺跡出土の動物遺存体 青森県南郷村畑内遺跡出土の近世人骨について 畑内遺跡出土漆器類の自然科学的分析と考察 南郷村畑内遺跡出土材の樹種 畑内遺跡近世墓出土の種実について 畑内遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果 畑内遺跡出土銅合金資料の自然科学的調査結果 畑内遺跡出土ガラスの自然科学的調査結果 E 後場出土動物遺存体について・B 後場出土の動物遺存体について	(株) 地球科学研究所 京都大学原子炉実験所 小林利彦 八戸市縄文学習館 瀧川淳ほか 東北大学大学院 井上美智子 元興寺文化財研究所 北野信彦 くらしき作陽大学 高橋利彦 木工舎「ゆい」 ハリノ・サウヴェイ (株) 赤沼英男 岩手県立博物館 赤沼英男 岩手県立博物館 赤沼英男 岩手県立博物館	7点 4点 44点 6点 6点 3点 20点 近世墓出土金属器 37点 近世墓出土品 2点
327	三内丸山(6)IV	自然環境 石質鑑定	層序	谷地形内の層序及びテラス状地形の形成について	小林和彦 八戸市縄文学習館 山口義伸 県史縄縄室総括主幹 松山カ 八戸市文化財審議委員 佐々木辰雄 県立八戸南高校教諭 山口義伸 県史縄縄室総括主幹 (株) 地球科学研究所 本吉恵理子 (株) 吉田生物研究所 岡田文男 京都造形芸術大学 (株) 吉田生物研究所 齋藤哲男 京都大学原子炉実験所 有限会社 遺物分析研究所 河西学 (財) 山梨文化財研究所	13点 9点 4点 全て遺跡近くの鷹森山・大新産と判定 岩石鉱物組成による分析 22点 (うち土器 17点) 以下5種セットの分析
330	十三湊遺跡	樹種同定 分析	木製品 漆塗膜	三内丸山(6)遺跡から出土した大型植物化石 三内丸山(6)遺跡より産出した大型植物化石 三内丸山(6)遺跡より産出した炭化材 青森県三内丸山(6)遺跡出土木製品の樹種調査結果 青森県三内丸山(6)遺跡出土木材の樹種	(株) 古環境研究所 新山雅広 (株) ハレオ・ラボ 吉川雅子 古代の森研究会 吉川純子 古代の森研究会 汐見真 (株) 吉田生物研究所 岡田文男 京都造形芸術大学 能城修一 森林総合研究所 鈴木三男 東北大学附属植物園 古代の森研究会	オニグルミ他 10点 3点 240点
333	餅ノ沢II	樹種同定 分析	木製品 漆塗膜	青森県十三湊遺跡出土木製品の樹種調査結果 青森県十三湊遺跡出土茶臼の漆膜構造調査	汐見真 (株) 吉田生物研究所 本吉恵理子 (株) 吉田生物研究所 岡田文男 京都造形芸術大学 山口義伸 県史縄縄室総括主幹	25点 2点
334	幸神	石質鑑定		山口義伸 県史縄縄室総括主幹	山口義伸 県史縄縄室総括主幹	
335	古坊	自然環境	地形・層序	遺跡と周辺地域の地形・地質	松山カ 八戸市文化財審議委員	
336	田向冷水	年代測定 樹種同定 同定	14C AMS 種実	科学年代測定と樹種同定 科学年代測定と樹種同定 種実同定	ハリノ・サウヴェイ (株) ハリノ・サウヴェイ (株)	1点 測定は加速器分析研究所 1点
338	三内丸山XX	石質鑑定			山口義伸 県史縄縄室総括主幹	

六ヶ所村表館(1)遺跡 a 地点採集の縄文早期資料など

福田友之

I. はじめに (図1)

表館(1)遺跡(県遺跡番号50019。図1-1~3)は、上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢にある縄文時代草創期・早期と平安時代を主とする遺跡である。この遺跡は、昭和47年から「むつ小川原開発事業」に伴い県教育委員会によって断続的に調査されてきており、昭和53年8~9月のむつ小川原港臨港道路建設予定地における試掘調査では、路線内外一帯の分布調査もあわせて行なわれた。その結果、a~fの遺物採集地点のうち、a地点(図1-1)からは早期中葉の物見台式土器片と石器、b



図1 遺跡の位置 (本図は国土地理院発行の5万分の1地形図「平沼」を複製したものである)

地点（図1-2）からは物見台式と前期の土器片等が採集され、a地点が物見台式期の遺跡である可能性が指摘された^(註1)。この後a地点は、昭和62年5～10月に同開発事業に関わる専用道路建設事業に伴い県文化課によって試掘調査が行なわれ^(註2)、さらに翌昭和63年5～6月には、県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行なわれた（I地区）。この結果、県内では数少ない物見台式期の竪穴住居跡を伴う遺跡であることが判明し^(註3)、注目されることとなった。

小稿で紹介する資料は、おもにこのa地点において筆者が表面採集した縄文早期資料である。発掘調査が行なわれた遺跡からの採集品であるため、参考資料といった意味で紹介するが、この機会に、県内他遺跡から表面採集した若干の早期土器等もあわせて紹介したい。

II. 表館（1）遺跡採集の土器（図1～3）

昭和54年から平成元年にかけてa地点から採集したものが大半で、他地点のものは非常に少ない。

（1）a地点（図2。図1-1）

口縁・胴・底部破片が多数あるが、おもに口縁部破片や大きな破片を紹介する。

1は貝殻腹縁による押し引き文が施されたものである。2～36は、貝殻腹縁文と沈線文を組み合わせた幾何学文が施されたもので、口縁部と胴部破片であり、口縁部は小波状を呈するものも多い。6～8・10・12～16・21～25・28～33には円形刺突文もみられる。また、口縁部内面に縦位の貝殻腹縁文が連続して施されたものも多い。26・29には肥厚した小円部がみられる。また、7には補修孔があげられている。37は唯一、沈線文と刺突文のみが施されたもので、径1mmほどの刺突が斜めに連続して施されている。38は表裏両面に条痕文が施されたものである。また、39は無文の口縁部破片、40・41は底部に近い無文部破片、42は乳房状を呈する尖底部破片である。

これらのうち、1は早期中葉の吹切沢式、2は早期中葉の鳥木沢式～物見台式、3～42は早期中葉の物見台式とみられる。

（2）a・b両地点間、b地点（図3。図1-2）

43・44はa・b両地点間、45・46はb地点から採集したもので、貝殻腹縁文が施されている。45は波状の口縁部破片で、貫通孔があげられている。いずれも早期中葉の物見台式とみられる。

（3）バス置き場地点（図3。図1-3）

昭和54年4～7月に当時、作業員の送迎バスを留めていた地点から採集した。48は表面に縄文、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉とみられる。また、47は半截竹管状の施文具による連続刺突文が胴部・底面に施された底部破片で、前期前葉の表館式とみられる。

III. 表館（1）遺跡採集の石器（図4・5）

昭和54～57年にa・b両地点から計22点（石匙のみがb地点）採集した。1～3は石鏃でいずれも基部に挟り込みがある。4は木葉形の両面加工の尖頭器、5は縦型の石匙で主要剥離面の片側の側縁に小剥離を施したもの、6は不定形スクレイパーである。7は磨製石斧の刃部小破片、8はすり石の破損品で、下端にすり面がある。9～11は敲き石で棒状礫や円礫に敲き痕がみられる。12～21は石錘で、大小の扁平円礫・角礫を用いており、21を除いて他はすべて縦長形の上下両辺に挟り込みがある。13・17は火熱を受け、一部変色している。22は礫器であり、両端を両面から剥離している。また、こ



図 2 表館 (1) 遺跡 a 地点採集の土器

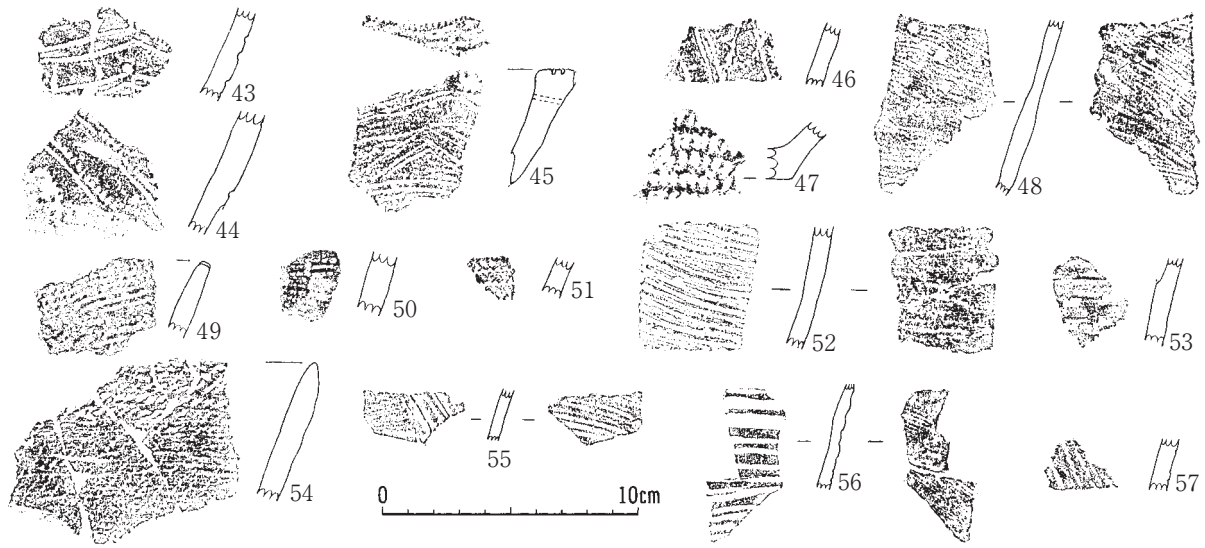


図3 表館（1）遺跡 a 地点外採集の土器

のほかに図示してはいないが珪質頁岩の剥片・チップ類もある。なお、石質は1～6はすべて珪質頁岩、7～22では、7が輝緑岩質凝灰岩、8・20が安山岩、9・12・16・18が砂岩、10・14が玄武岩、15が細礫岩、11・13・17・19が安山岩質凝灰岩、21がチャート、22が石英斑岩である。また、重さは1～3がそれぞれ0.3g、0.6g、1.8gであり、4は23.3g、5は10.9g、9は157.4g、12～22は、それぞれ74.0g、36.4g、73.1g、210.2g、450.9g、274.6g、227.3g、279.9g、92.8g、147.9g、301.5gである。

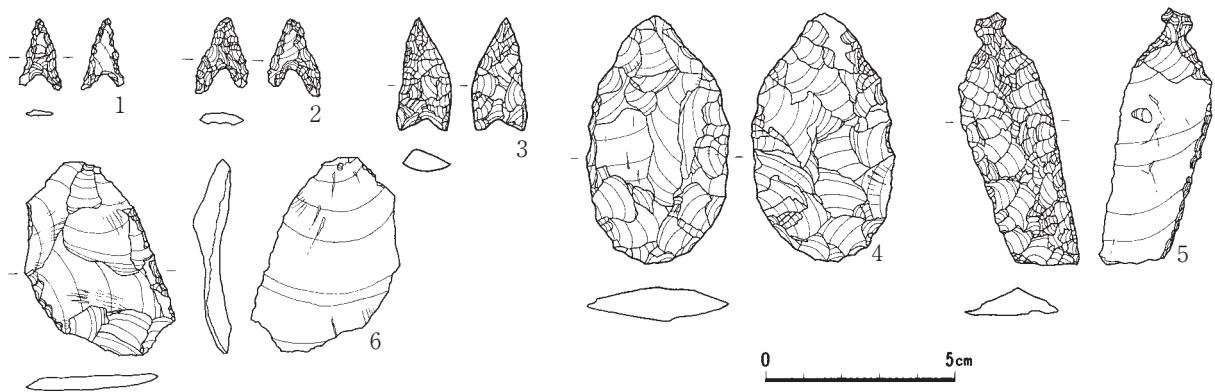


図4 表館（1）遺跡 a 地点採集の剥片石器等

IV. 他遺跡採集の土器（図3）

（1）新納屋（2）遺跡（六ヶ所村大字鷹架字道の下。県遺跡番号50109。図1-4）

昭和57年6月に採集した。49は貝殻腹縁の押し引き文が施された口縁部破片、50は胴部破片である。いずれも早期中葉の吹切沢式とみられる。ちなみに当遺跡は、昭和54年4～7月に、むつ小川原開発



図 5 表館 (1) 遺跡 a 地点採集の礫石器

に関わる幹線連絡道路建設事業に伴い県文化課によって調査され、吹切沢式期の竪穴住居跡が2軒発見されている^(注4)。

(2) 庄内（1）遺跡（六ヶ所村大字倉内字笹崎。県遺跡番号50090。図1-5）

昭和54年7月に庄内墓地遺跡^(注5)（現在の庄内（1）遺跡）から採集した。51は貝殻腹縁文が施されたもので、物見台式とみられる。52は表裏両面に条痕文が施されたもので、早期、53は表面に低い細隆起線文と浅い刺突、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉の早稲田第3類とみられる。

(3) 米軍三沢基地内鯨森遺跡付近（図1-6）

昭和60年10月に、上記にあるゴルフ場脇の切通しから採集した。54は貝殻刺痕・腹縁文が施された口縁部破片で、早期中葉の寺の沢式とみられる。55は表面に細隆起線文、裏面に条痕文が施されたもので、早稲田第3類とみられる。また、56は表面に平行沈線文、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉のムシリI式とみられる。

(4) 寺の沢遺跡（三戸町大字川守田字寺の沢。県遺跡番号58023。図1-7）^(注6・7)

昭和58年8月に採集した。57は貝殻腹縁文が施されたもので、早期中葉の寺の沢式とみられる。

V. おわりに

表館（1）遺跡 a 地点採集の土器は、大半が早期中葉の物見台式に比定されるものであり、石器についても、この遺跡の調査結果^(注3)をみれば、ほぼ物見台式期のものと考えられる。ここに紹介した資料はいずれも表面採集品で、しかも断片的なものではあるが、この遺跡における物見台式期の文化内容を考えるうえで、多少とも参考になるところがあれば幸いである。

小稿を終えるにあたり、石質鑑定をしていただいた弘前大学工学部の柴正敏氏、種々ご教示・ご協力いただいた三沢市教育委員会の長尾正義氏、及び当センターの齋藤正氏に対し、心から感謝申し上げる次第である。

【注】

- (1) 青森県教育委員会 1979 『むつ小川原港臨港道路に係わる埋蔵文化財発掘事前調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第50集
- (2) 青森県教育委員会 1989 『表館（1）遺跡試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第121集
- (3) 青森県埋蔵文化財調査センター 1990 『表館（1）遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
- (4) 青森県教育委員会 1981 『新納屋遺跡（2）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
- (5) 青森県教育委員会 1974 『むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布・試掘調査報告書—昭和48年度』青森県埋蔵文化財調査報告書第10集
- (6) 名久井文明 1972 「東北北部における縄文式早期の新型式2例 略報」『青森県立三戸高等学校研究紀要』第2集
- (7) 名久井文明 1974 「北日本縄文式早期編年に関する一試考」『考古學雑誌』第60巻第3号

執筆者一覧

ふくだともゆき
福田 友之 青森県埋蔵文化財調査センター
次長（調査第一課長）

なりたしげひこ
成田 滋彦 青森県埋蔵文化財調査センター
総括主幹（調査第二課長）

しらとりふみお
白鳥 文雄 青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主幹（資料課）

研究紀要 第 8 号

発行年月日 2003年 2月28日
編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
電 話 017-788-5701
F A X 017-788-5702
印 刷 長尾印刷株式会社
〒030-0931 青森市平新田字森越17-1
電 話 017-726-7121
F A X 017-726-9237

BULLETIN
OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.8

CONTENTS

- Some aspects of SAIBANA type potteries. *NARITA* Shigehiko
- X-ray radiography applications to archaeological objection. *SHIRATORI* Fumio
- List of the Natural Scientific Analyses. *SHIRATORI* Fumio
- Surface collection of the initial jomon period from the Omotedate(1) site,etc. *FUKUDA* Tomoyuki
-

February 2003
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER